主唱／法務省

第73回 “社会を明るくする運動”
～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～

作文コンテスト
入賞作文集

“社会を明るくする運動” 中央推進委員会
更生保護法人 立川更生保護財団

第72回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

令和４年12月23日　法務省

法務大臣賞表彰式

（前列右から）
日本更生保護協会事務局長　幸島　聡
日本ＢＢＳ連盟事務局長　西瀬戸　伸子
中学生の部　受賞者　植山　いろは
法務大臣　齋藤　健
小学生の部　受賞者　折居　潤希
日本更生保護女性連盟会長　千葉　景子
全国保護司連盟事務局長　吉田　研一郎

（後列右から）
植山さん担任教諭
植山さん御家族
折居さん御家族
法務省大臣官房秘書課長　内野　宗揮
法務省保護局長　宮田　祐良

（敬称略、所属役職等は表彰式当時）

小学生の部　法務大臣賞　授与

中学生の部　法務大臣賞　授与

はしがき

法務省が主唱する〝社会を明るくする運動〟は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と犯罪や非行をした人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な明るい地域社会を築くための全国的な運動です。

その中でもこの作文コンテストは、本運動の一環として、次代を担う全国の小・中学生に、日常の家庭生活や学校生活の中で体験したことを基に、犯罪・非行のない地域社会づくりなどについて考えたことや感じたことを作文にすることを通じ、本運動に対する理解を深めてもらうことを目的としています。第四三回（平成五年）運動から始まり、今回で三一回目となりました。

令和五年の作文コンテストには、全国から小学生の部一二七、八八〇点、中学生の部一七八、四二二点、合計三〇六、三〇二点の応募がありました。応募作品については、各都道府県推進委員会の選考を経て、中央推進委員会で審査した結果、法務大臣賞をはじめとして、小学生の部十六点、中学生の部十六点の入賞作品が決定しました。

本作文集は、この入賞作品を収録したもので、更生保護法人立川更生保護財団の御協力により制作されました。一人でも多くの人に作文を読んでいただき、児童・生徒の皆さんの思いを犯罪や非行のない地域社会づくりに役立ててもらうとともに、これから応募をされる児童・生徒の皆さんの参考になるよう願っております。

終わりに、この作文コンテストの実施に当たり、御後援をいただいた全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国小学校国語教育研究会、全日本中学校国語教育研究協議会、公益社団法人日本ＰＴＡ全国協議会をはじめ、多大な御尽力をいただいた全国の教育委員会や学校関係者の皆様に対し、深く感謝を申し上げます。

令和六年三月

〝社会を明るくする運動〟中央推進委員会

目次

最優秀賞（小学生・中学生）

法務大臣賞

家族を再生する「読み聞かせ」の力…　山梨県山梨市立八幡小学校　六年　高梨詩楠　6
明るい社会にするために……　鹿児島県天城町立北中学校　二年　角川凜　9

優秀賞

全国連合小学校長会会長賞

罪を憎んで人を憎まず……　北海道旭川市立神居東小学校　六年　佐久間安里　12
逃げ道を作る……　群馬県玉村町立上陽小学校　六年　山﨑心結　15
心の声に耳をすまして……　東京都港区立白金小学校　四年　野地美緒　18

全日本中学校長会会長賞

幸せを「わけわけ」する……　滋賀県大津市立仰木中学校　三年　相井咲乃　21
温かなつながりで明るい社会へ…　島根県島根大学教育学部附属義務教育学校　八年　片岡睦深　23
地域の宝……　長崎県島原市立第一中学校　三年　島田典明　26

全国保護司連盟理事長賞（小学生の部）

社会を明るくするために……千葉県君津市立清和小学校　六年　落合悠翔　29
お兄ちゃんの居場所……兵庫県加古川市立若宮小学校　六年　谷口寧音　32
明るい学校へ……愛媛県愛南町立城辺小学校　六年　岡下光葉　34

全国保護司連盟理事長賞（中学生の部）

非行・犯罪について私が思うこと……北海道北広島市立東部中学校　二年　加藤愛理　36
私達が見るべきもの……東京都昭島市立昭和中学校　二年　髙瀬萌衣　39
「矢印」……福井県越前市武生第二中学校　二年　川本一翠　41

日本更生保護女性連盟理事長賞（小学生の部）

ブックカバーが教えてくれたこと……兵庫県三田市立武庫小学校　六年　苅谷はづき　44
誰もが誰かの支えになる社会を…和歌山県和歌山大学教育学部附属小学校　五年　丸山清良　46
社会に僕ができること……熊本県熊本市立帯山小学校　五年　宮田晃成　49

日本更生保護女性連盟理事長賞（中学生の部）

勇気の一言……宮城県東松島市立矢本第一中学校　二年　尾形柑南　52
あの町が教えてくれた大切なもの……茨城県立並木中等教育学校　二年　田所直幸　55
自分を支えてくれる人の存在……千葉県八千代市立大和田中学校　三年　和田明香里　58

日本ＢＢＳ連盟会長賞（小学生の部）

人と人とのつながりを大切に……　富山県上市町立陽南小学校　五年　森井このみ　60
こども食堂でつながる笑顔……　大阪府池田市立石橋小学校　六年　森本太蔵　63
大切な心を守りたい……　和歌山県岩出市立中央小学校　五年　坂本陽　66

日本ＢＢＳ連盟会長賞（中学生の部）

挨拶で明るい社会を……　群馬県高崎市立塚沢中学校　二年　富所美結　69
心のハイエナに寄りそうこと…　栃木県立矢板東高等学校附属中学校　一年　芝本天音　72
あなたと私……　山口県長門市立仙崎中学校　三年　美濃穂乃花　75

日本更生保護協会理事長賞（小学生の部）

みんなでつくろう明るい社会……　千葉県千葉市立あすみが丘小学校　六年　渡邉心結　78
傷つけたものたちへ……　広島県広島市立古市小学校　六年　鄭潤希　81
居場所のある幸せ……　熊本県熊本市立帯山西小学校　六年　森田桜　84

日本更生保護協会理事長賞（中学生の部）

犯罪者の在り方……　山形県長井市立長井北中学校　二年　松木哲翔　86
明るい地域社会を目指して……　愛媛県宇和島市立城東中学校　三年　島瀬陽　88
「悩んでいる君」に気づける社会へ…　沖縄県宮古島市立城東中学校　一年　下地杏梨　91

更生保護法人　立川更生保護財団について……94

第74回〝社会を明るくする運動〟
～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～
作文コンテストのお知らせ……95

お問い合わせ先……96

審査員

（役職名は審査当日のもの）

全国小学校国語教育研究会会長　佐伯孝司

特定非営利活動法人
日本ＢＢＳ連盟会長　今福章二

全日本中学校国語教育研究協議会長　中嶋富美代

更生保護法人
日本更生保護協会理事長　榊原定征

更生保護法人
全国保護司連盟理事長　谷垣禎一

法務省保護局長　押切久遠

一般社団法人
日本更生保護女性連盟理事長　千葉景子

小学生の部

法務大臣賞（最優秀賞）

家族を再生する「読み聞かせ」の力

山梨県山梨市立八幡小学校　六年　高梨（たかなし）　詩楠（うたな）

「本を読んであげるから、こっちに来て。」
母さんが私を呼ぶ。
「また？私だって色々と忙しいんだよ？」
と私が言うと、母さんは決まってこう答える。
「読み聞かせの練習だから、お願いします。」
小学校四年生頃まであったこんな会話。でも最近、母さんは前みたいに私をさそってこない。
　母さんは私に、たくさんの本を読んでくれた。『機関車トーマス』シリーズや『バーバパパ』、『ぐりとぐら』や『がまくんとかえるくん』、一冊を何度もくり返し読んでもらったものもあった。つかれていたのか、時々読んでいる最中に母が寝てしまうことがあった。それからは自分でも読めるようになり、わが家での読み聞かせは月一、二回になった。私は気はずかしさもあって、
「もう読み聞かせ卒業でいいよ、母さんも大変だし。」
と言ったら、
「そうだね、わかった。」
母さんは少しさみしそうだった。
　プリズン・ライブラリー。最近出会った不思議な言葉だ。刑務所と図書館。関係のない二つの場

所が、どうしてつながったんだろう。特集された記事では、「女性受刑者とわが子をつなぐ絵本の読みあい」という本が紹介されていた。

罪を犯して刑務所にいる母親たち。家族と離れて暮らす彼女たちが取り組んでいるのは絵本の読み聞かせだ。”塀の外“に暮らすわが子に向けて受刑者が絵本を読む練習をし、録音したCDを届ける「絆プログラム」は、山口県の刑務所で行われている。

本の冒頭を読み、私はすぐに本を閉じた。「悪いことをしてつかまって刑務所に入っているのに、なぜ読み聞かせをしたいと思えるんだろう」「一度でも刑務所に入った母親は、子どもに会うべきじゃない」と感じたからだ。罪を犯したら、それで終わり。続きなんてない。私はなぜかかたくなにそう思っていた。

しばらくして、母さんにその本の話をした。

「読んだよ。でもあなたには難しいかもね。」

と言った。

「でもその人の『声』を聞いたら、考え方が変わるかもしれないよ。」

と言って、録画した番組を見せてくれた。それは実際に受刑者の読みあいを取材した番組だった。そこに出てきたのは、私の近くにもたくさんいそうな普通の女性、刑務所の中だからか、みんな同じ服を着ている。参加者はそれぞれ本を選び、練習している。そこには、『わたしが赤ちゃんだったとき』や『やさしいライオン』や、私も読んでもらったなつかしい本、何よりも気になったのは、練習している母さんたちの『声』。緊張しているみたい。でもやさしい。一人一人の母さんの声は温かくやさしかった。

私は初めて気づいた。そこにいるのは、私と同じ人間、私の母と同じように「誰かの母」なんだ。彼女たちの罪状は、薬物が多かった。でもその理由が、一人親家庭や貧困家庭にある小さなストレスだ。「自分の母親がこんな状きょうになったら」「自分の家族が刑務所にいたら」。そこにいて、絵

本を読んでいる母さんたちの「声」を聞いて、罪をつぐない、社会に戻ることの大切さを思い知らされた。

プログラムの参加者は、最後に読み聞かせを録音する。みんな緊張している。読んでいる母さん一人一人に、「がんばれ、がんばれ」と応えんしている私がいた。「早く家に戻って、さみしい思いをしている子供たちをだきしめてほしい」。私は本も図書館も大好き。本や読書が自分にパワーをくれるのも知っている。でも今回、絆プログラムの映像を見て気づいたのは、本が作りだす、まさに「絆」だ。近くにいても離れていても、本があればつながれる。読み聞かせってすごいと思う。

もう一つ、気づいたことがある。それは、読み聞かせは、「読んでもらう人」だけではなく、「読んだ人」もいやしてくれる。私の母さんは、単に私に読んであげている人じゃない。きっと私が聞いているから、読みたいんだ。

「母さんちょっと来て。」

私は一冊の本を手に取って、母さんを呼んだ。

「これ読んで。」

選んだのは、『ふくろうくん』。楽しいけれど、ちょっぴり切ないお話もあって、何度も何度も読んでもらった。大切な本。

「母さん、ありがと。」

私は目の前にいる母、そして絆プログラムをへて社会復帰した母さんたち、みんなに伝えたい。

中学生の部

法務大臣賞（最優秀賞）

明るい社会にするために

鹿児島県天城町立北中学校　二年　角川（かくがわ）　凜（りん）

「俺の恐怖がわかってたまるか！まともに働こうが、友達や恋人を作ろうが、週刊誌にさらされれば全部無駄になるって突きつけられたんだぞ！どうせ無駄になんなら、最初から犯罪に手を染めて大金稼いだ方が得じゃねぇか！」

これは松村涼哉さんの『十五歳のテロリスト』（ｋａｄｏｋａｗａ．二〇一九）という本の一文です。犯罪を犯すも、更生を目指していた灰谷ユズルでしたが、被害者遺族によって過去の事件を世間にさらされ、人生をやり直す気持ちを断ち切られてしまった時に言った言葉です。

この本を読んで、私は「犯罪」への見方が変わり、同情する気持ちが芽生えました。犯罪は悪い、そこは間違いないですが、加害者も被害者としての経験や思いを抱えていて、事件の表には見えない、心の奥深い思いがあることに気づかされたのです。ニュースやミステリーなどで事件を見聞きすると、犯人が一方的に悪いと、今までの私は思い込んでいました。けれど、加害者にも被害者と同じように、苦しみや悲しみ、痛み、そうならざるをえない境遇や育ちがあり、心の奥深く、本当の気持ちを見ていかない限り、根本的な解決には

ならないことに気づいたのです。

この本にあるような悲しい現実は、どのようにしたら断ち切れるのでしょうか。私だって、大切な人が殺されたら、その犯人を許すことなどできません。けれど、復讐をすることが本当の意味で望むことではないことも分かっています。このどうにもならない痛みの連鎖を、どうしたら断ち切れるのか、私なりに考えたことを二つあげます。

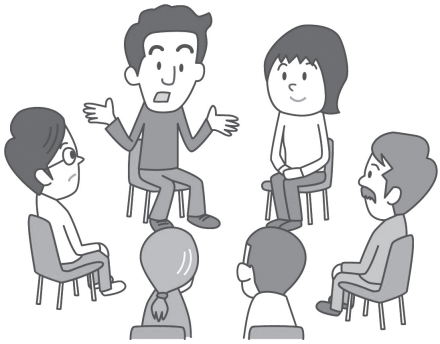
一つ目は、心の感情を表現する対話の大切さです。それはガンジーの「全ての攻撃は悲鳴である」という言葉を思い出したからです。人が人を攻撃する時、つまり加害者になる時、実はその人は相手を傷つけたいわけではなく、「相手が攻撃してきたからやり返した」と被害者意識で思い込んでいることが多いのです。これが復讐が起きる仕組みなのだと思います。これを断ち切るためには、この心の中の痛みや悲しみ、苦しみを言語化し、表現していくことが大切だと思いました。

受刑者同士の対話をベースに犯罪の原因を探り、更生を促すプログラムを日本で唯一導入している島根あさひ社会復帰促進センターを取材した映画『プリズンサークル』（坂上香、東風　二〇一九）では、心の内を人に伝え聞いてもらうことによって、人との関わり方が変わっていくとありました。同じ気持ちの人と出会い、本音で語り合い、自分のことをわかってもらえたと共感してもらえることで、再犯率が大きく下がるそうです。人は一人で抱え込んでも、マイナスの気持ちが大きくなるばかりですが、人と話すことによって、他の意見やプラスの考え方を知ることができます。こうなれば復讐のために加害者を苦しめたり、再犯を犯したりしなくてもよくなるのではないかと考えました。したがって被害者が悲しい、悔しい、復讐したいという気持ちを打ち明けたり、共有できる場所をつくることが大切だと思います。

二つ目は、地域のつながりです。地域内のつながりが薄いと非行に走りやすいそうです。私は東京から徳之島の小さな集落に引っ越してきまし

た。地域の濃いつながりを日々実感しながら生活しています。車に乗っていればすれ違うたびに手を振ってくれ、歩いていれば、「乗ってく？」とたくさんの人が声をかけてくれます。困っていてもいなくても、大人も子どもも、皆が声をかけ合い支え合って生きています。たくさんの行事があり、近所で知らない人はほとんどいません。子どもは全員が子ども会に所属し、掃除やボランティア活動、敬老会、歓送迎会、季節の行事、たくさんの時間を共に過ごしています。そして集落の大人は「他人の子も我が子のように育てる」とよく言っています。悪いことをしたらどの子も怒るし、そして本気で親身になって可愛がってくれます。徳之島の人はお互いに見守り合っている感じがします。これでは近所の人の目や信頼があって、悪いこともできません。地域の中でたくさんの人に話しかけてもらい、たくさん愛されて、人や自分のことを信頼することができたら、犯罪や復讐をしようとする気持ちはきっと減ると思います。したがって地域のつながりをつくっていく取り組みが大切だと思いました。

　これらのことから、再犯を減らし明るい社会にするためには、人とのつながりを大切にし、また同時に自分の本当の気持ちを打ち明けられる場所の存在が人の心を救っていくのだと思います。



小学生の部

全国連合小学校長会会長賞（優秀賞）

罪を憎んで人を憎まず

北海道旭川市立神居東小学校　六年　佐久間（さくま）　安里（あんり）

私の家の庭には、ひいばあちゃんが遺してくれた花が毎年太陽のようにかがやき、咲きほこっています。

夏のある日、母の

「ちょっと見て。」

という声が聞こえ、窓の外を見てみました。すると、おばあさんが私の家の庭に咲くアジサイのすぐ近くに立っていました。

「散歩の休けいの間にきれいなアジサイを見ているのかな。」

と思っていましたが、そのおばあさんははさみを取り出し、アジサイを何本も切ってしまいました。あまりにも突然な出来事に私はびっくりして、声も出せませんでした。となりにいる母の顔を見ると、おばあさんの行動をじっと見ていました。アジサイを切り終えたおばあさんが歩き出しましたが、私達の視線に気づき、足を止め、アジサイをさっとかくしました。見つめ合っている時間がとても長く感じ、ふるえが止まりませんでした。おばあさんが気まずそうに歩き出すと母が窓を開け、

「次からはもうやめてください。」

とさけびました。その日の夜、私は

「なんでこんな大切な花をぬすんだんだろう。」とずっともやもやしていました。

ぬすんだのを見たのはその一度きりでしたが、もし道ですれちがったら何か言われそうでとても怖く、しばらくは姉と待ち合わせて下校していました。

それから数ヵ月が経ったある日、夕食を食べていると、母が話し出しました。

「今日、あのおばあさんとすれちがって、あいさつしてみたんだ。そしたら、おばあさんが立ち止まって、深々とおじぎをしながらあいさつを返してくれたよ。もしかして、ぬすんでごめんなさいという気持ちが入ってたのかもしれないね。」

その話をきっかけに、家族で話し合いました。ひいばあちゃんが元気な時に、咲いたらもっていっていいよと言われていたのかもしれない。きれいだったから、家にかざってみたかったのかもしれない。そんな話し合いをしているうちに、私はある言葉を思い出しました。それは、家族でよくやっていたかるたの

「罪を憎んで人を憎まず」

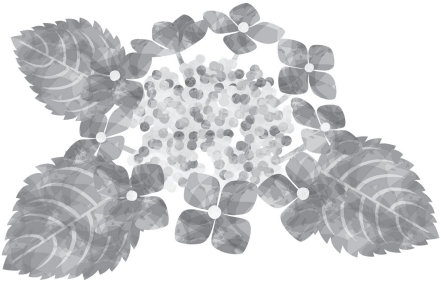
ということわざです。ぬすんだ人が悪くないわけではないけれど、その人のことを許し、温かい気持ちで受け入れることも大切ではないだろうかと思いました。

テレビをつけると、毎日のように非行や犯罪のニュースを目にします。一度罪を犯した人達をただ憎むのではなく、一度相手の立場になって考え、反省することを期待して許し、受け入れることによって、その人達が心からの反省をできるようになるかもしれないと思います。

自分の感情は人に移ります。イライラしていると相手にもイライラが伝わり、いやな空気が広まります。笑っていると相手にも楽しさが伝わり、明るい空気が広まります。それと同じように、相手を許し、受け入れると、安心感に包まれ、二度と非行や犯罪をしないという気持ちが広まり、安心できる世の中になるのではないでしょうか。

一度のあやまちで未来の道を閉ざしてしまうのはもったいないし、周りの人達にそのような権利はないと思います。人はいくらでも変われるのです。

私も相手を受け入れ、安心感を与えられる存在になりたいです。そのためにまずは、もしまたあのおばあさんに会ったら、明るく元気にあいさつをしたいと思います。



小学生の部

全国連合小学校長会会長賞（優秀賞）

逃げ道を作る

群馬県玉村町立上陽小学校　六年　山﨑（やまざき）　心結（みゆ）

私は一般の小学生。けれど、他の子よりかはニュースをよく見ると思う。ニュースをみているときに出てくるのが犯罪や非行のこと。犯罪や非行の多くは人間関係や家庭環境に悩んで先走ってしまうことが多いのだとか。きっと、そんな人達はしっかりと逃げたのだろう。ただ、逃げる道を間違えてしまっただけ。普段、人間はいつも逃げながら生きていると思う。ストレスが溜まった時、ストレス発散に好きなことをする。それだって逃げているのだ。しかし、今の日本は「逃げる」という言葉はネガティブに聞こえるし、「だめなこと」という雰囲気がある。けれど、私は逃げることはだめなことではないし、明るい逃げ道があれば犯罪や非行もなくなると思う。

五年生のころ、私は算数が大好きだったし、とても得意だった。友達からも先生からも褒められてすごく嬉しかった。けれど、

「心結ってさ、勉強できるけど調子乗ってるよね」

グサッと刃物が胸に刺さった気がした。その日はずっと暗かったと思う。家に帰る時、誰でもいいから少し話を聞いてほしい。少しでもいいから安

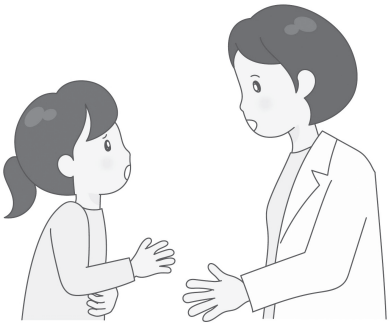
心したい。そう思っていたけれど、お母さんが帰ってきた時、弟が塾の宿題が難しいと駄々をこね始めた。お母さんも仕事から帰ってきてすぐにそんな事言われてイライラしていた。そこでお母さんに相談するという道はなくなってしまった。だから好きなことをしようと思った。そうしたら、

「二階で洗濯物干してるから面倒見てて。ついでに勉強教えてあげて。」

とお母さんに言われた。好きなことでストレス発散するという道も失ってしまった。今思えば、趣味である読書をしながらでも面倒をみたり、勉強を教えてあげたりすることは何度もしてきた。でも、その時は体も心も疲れていてそんなことも思い出せなかったのだろう。私は「お姉ちゃん」とよんできた弟に対して「そのぐらい自分でできるでしょ！駄々こねる暇があったらやりなよ！」と言ってしまった。罪を犯してしまった人もこうだったのだろうか。ストレスが溜まって、道がなくて、苦しみから逃げたかっただけなのに。話を聞いてくれる相手がいるだけで心がスッキリする、安心するのに。世間から見たらそんなことちっぽけだし、誰にでもできると思われるだろう。でも、そんな人が少ないのが現実だ。私は今の担任の先生に相談をしたことがある。正直、その先生が担任になってから一ヶ月もたっていなかったし、先生に相談するなんて初めてだったから怖かった。でも、先生は丁寧に話を聞いてくれて、お母さんにも電話してくれて話すきっかけとなった。先生もだけど、お母さんと話した時、心が軽くなった。自分の思いを伝えるだけでこんなに楽になれるんだって実感した。きっと、先生は逃げ道を作ってくれた。今後、このようなことがないように。先生だけでなくお母さんに伝えられるように。その行動が私を救ってくれたんだ。「救う」なんておおげさかと思われるけど、簡単なことではないし、本当に今でも感謝している。これがもっと大きな悩みだったら。実際、そんな悩みを抱えて犯してしまったという人も少なくはない。そ

れが子供だったら？もし更生したとしても悪口を言われたり、批判されたりしてまた犯罪という悪い道に逃げてしまったら？そう考えるだけでぞっとする。悩んでいる本人が話すこともだけど、それに気づいてあげる社会になったらいいなと思った。

犯罪だけではなく、暗い逃げ道というのはたくさんある。自傷行為や八つ当たり、一番ひどいのが自殺。本人たちは逃げているのだろう。そして、正しいと思ってしまうのだろう。けれど、結局は自分を傷つけている。傷ついている自分を開放したいのに開放するために自分を傷つけてしまう。そんな酷くて恐ろしいことは他にないだろう。そして、それがもし自分の友達だったら、知り合いだったらそれこそ怖い。だからまずは話を聞いてあげるという簡単な逃げ道を作り、更生しようと努力している人や暗い逃げ道に逃げてしまった人たちを明るい逃げ道へ導くためにその人の足元を照らす。そんな存在に私はなりたい。



小学生の部

全国連合小学校長会会長賞（優秀賞）

心の声に耳をすまして

東京都港区立白金小学校　四年　野地（のじ）　美緒（みお）

私はまだ、身のまわりで犯罪や非行といわれるものを実際に見たことはない。ただ、ニュースを見ていると、毎日のように犯罪が起きていることが分かる。

私は学校で「社会を明るくする運動」とは、犯罪や非行をなくすための運動だと教わった。そしてその時初めて、私達と同じくらいの年れいの子も、たくさん犯罪を起こしていることを知った。つまり、私や友達がいつ犯罪を起こしてもおかしくないのだ。

私は、ドキドキしてしまって、中学生の姉と話してみた。

「非行をしてしまう子は、いつも先生におこられる子とか、いじめっ子なのかな？」

姉は少し考えてから、首を横にふった。

「私だって、ものすごくさびしくなって、だれでもいいからだれかをきずつけたい、なんて思ったことがあるよ。」

私はものすごくびっくりした。なぜなら、姉はいつも学校で「優等生」と言われ、先生におこられることだってほとんどないからだ。

私はそれから、少し考えてみた。たしかに私も

「優等生」でいたいし、友達や先生から信頼されるとうれしい。一方で、私だってたまにはみんなと悪ふざけをしてみたい、と思ったことはある。私は友達からなやみや文句を聞かされることが多い。でも、正直に言うとたくさんの相談を受けるのは大変だ。「自由に好きなことをしていい」と言われたら、私もやんちゃなクラスメイトのようにふるまいたい、と思ってしまうのだろうか。そういうモヤモヤした気持ちが何かのきっかけで爆発してしまったら、私も犯罪者になってしまうのかもしれない。

よく考えてみれば、犯罪をするのはいつもサングラスをかけているこわい顔のおじさんとはかぎらない。優しい女の人も、いつも笑顔のおじいさんも、もちろん元気な子どもだって、ある日とつぜん何か悪いことをしたくなってしまうかもしれない。

悪いことを全くしない人なんていないけど、それと同じで「もっと優しくなりたい」とか「もっとだれかを好きになりたい」と一度も思ったことがない人だっていないと私は思う。「なりたい自分」があるはずなのに、そうなれないイライラが、とがった気持ちを作ってしまうのかもしれない。

私はあることを思い出した。去年、姉が夜にとつぜん大泣きして、母に友達への悪口や先生への文句をたくさん言っていたことがある。もし、私たちにお母さんやお父さん、他にもたくさんの頼れる大人が一人もいなかったら、お姉ちゃんはどうしていただろう。お姉ちゃんの「さびしいよ」「つらいよ」という言葉はだれが聞いてくれていたのだろう。

いずれ私たちは大人になって一人暮らしをするかもしれない。お母さんになって、子どもが生まれるかもしれない。その時、とつぜん「さびしい」「つかれた」と感じても、大人になった私は、自分でその気持ちを受け止めてあげることはできるだろうか。

私が知らないだけで、世の中には私達よりずっ

とつらい思いをしている人がいて、死にたくなってしまうくらいひとりぼっちを感じている人だっていると思う。でも私は、その人達の声を直接聞いてあげることはできないし、そういう人達の「つらい」「さびしい」は、だれにも聞こえないくらい小さな声かもしれない。

私はまだ子どもなので、そういう人達のためにできることはかぎられている。でも、周りにいる家族や友達の声だったらいつだって聞くことができる。

「おはよう!」「昨日は何食べた?」「子犬は元気?」

たったそれだけの会話の中でも、私はいつも一緒にいる友達ならちょっとした変化に気付ける自信がある。

犯罪や非行がいつどこで起こるかは分からない。でも、いつも一緒にいる人たちの心を毎日、少しだけ明るくすることなら、私にも出来るような気がする。みんなの声を聞いて、優しく受け止めることはすばらしいことだと気が付いたからだ。

「社会を明るくする運動」とは、みんなが自分の心を明るくする時間を作ることだ。だから私は、地域を明るくすることに少しでもつながることを願って、私自身とみんなのありのままの声に耳をすませてみたい。いつか、たくさんの人の心を照らして温めて、明るくしてあげられるような、そんな大人になりたい。

中学生の部

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

幸せを「わけわけ」する

滋賀県大津市立仰木中学校　三年　相井（そういい）　咲乃（さきの）

連日、テレビや新聞では悲しく痛ましい事件が報道されている。そういったニュースの中で、加害者をよく知る人物へのインタビューというものを見ることがある。その中で、加害者を「そんな事する子じゃない」と言っている人が多いように感じる。私は、周りの人達から良いイメージを持たれている人がなぜ悲惨な事件を起こすのか気になった。

調べると、非行を行う人々は、一般的な人に比べて孤独な傾向にあると分かった。つまり、周りに良いイメージを持たれていて、非行とは縁がないように思えても孤独だから非行を行ってしまうことだ。

私と同じ小学校の先輩で、とてもやんちゃな人がいた。授業中はほとんど教室におらず、気付くと校庭で一人で遊んでいたり、学校の窓ガラスを割ったり、別の先輩と大喧嘩をしてケガをしたりする人だった。私も、その先輩にひどい目に合わされたことが何度もあった。私はその先輩を、強くてただ恐ろしい人だと思っていた。私の同級生や周りの大人も不良や、非行少年だと言い、危ないからあまり近づかないほうが良いと言う人もいた。しかしその先輩は、その先輩の同級生にはよ

く好かれている人だった。

偶然、その先輩と同じスイミングスクールで、同じ時間で、同じ送迎バスにしばらくの期間乗ることになった。初めは恐ろしくて恐ろしくてたまらなかった。だけど、バスの中で先輩と話していくうちに先輩の人となりが分かっていった。ヘビのゲームが好きで、自分の考えをしっかり持っている。普段は明るくムードメーカーで、運動神経が抜群で、気分が良い日にはお菓子をくれる実は優しい人。その先輩がよく言っていた言葉がある。それは「わけわけしろよ」である。「わけわけ」とは漢字で分け分けと書き、関西弁で「分ける」や「等分」という意味の言葉だ。つまり、「わけわけしろよ」は「みんなで分けてね」という意味である。お菓子をくれるときは、「わけわけして食べろよ」ヘビのゲームを貸してくれるときは「わけわけして使えよ」と言う。ゲーム機を分けるというのは意味が分からないが何となく、順番に交代して使ってと言っていると解釈していた。私はこの「わけわけ」という言葉が大好きだ。なぜなら、誰も一人にしない言葉だからだ。とてもやんちゃな先輩だったけど、誰かを一人ぼっちにしないから好かれているのだと知った。

みんなが「わけわけ」を続ければ誰も一人にならないし、誰も悲惨な事件を起こさないでよくなるのではないかと考える。私から周りの多くの人に幸せをわけわけする。もらった人がまた他の人に幸せをわけわけする。自分が「幸せをわけわけする輪」の中にいるという実感があれば、孤独なんて感じないだろう。つらいこともわけわけしてみんなで悲しめば一人ぼっちじゃないと分かり元気が出ると考える。

もらうばっかりではなく、あげるばっかりでもない、「わけわけ」するからこそ仲間意識が生まれる。孤独が非行を生むのなら、誰も一人ぼっちにしない方法を執ればいいと思う。「わけわけ」の精神を大切にして、非行のない明るい未来を築きたい。

中学生の部

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

温かなつながりで明るい社会へ

島根県島根大学教育学部附属義務教育学校　八年　片岡（かたおか）　睦深（むつみ）

ソフトテニス部の練習で、週に一度校外のコートを利用する。そのコートの近くに物々しい雰囲気の刑務所があることが、いつも少し怖かった。ある時、母にこの話をしたら、母は洗面所から一つの石鹸を持ってきた。それは、私が部活で汚れたウエアや靴下を洗うのによく使っている「ブルースティック」という洗濯石鹸だ。

「この石鹸、どこで作られているか知ってる？」と母が聞いてきた。知らなかったので何も答えずにいると、

「これは、横須賀の刑務所で、受刑者の人が作ってるんだよ。」

と教えてくれた。よく使っているこの石鹸が刑務所で作られていることに驚いた。それまで私は、刑務所は犯罪者を捕えておく場所、受刑者は罪を犯した悪人、とだけ考えていた。別世界と思っていた刑務所の中での活動など考えたことがなかったので、自分の生活に関係していることにとまどった。

しかし、母から渡された「プリズン・サークル」という本を読み、私の視野は広がった。これは、私の住む島根県の刑務所「島根あさひ社会復帰促

進センター」について書かれた本だ。受刑者が語る、罪や償い、また、幼い頃に経験した貧困、いじめ、虐待、差別などの記憶がつづられている。私は、受刑者の多くは加害者となる前は被害者だったことを知った。犯罪は決して許されるものではないが、犯罪者に対し「悪人」と、ただレッテルを貼るだけでは犯罪は無くならないと思った。

また、日本では四割近くの受刑者が、出所後五年以内に刑務所へ戻ってくるそうだ。以前の私は、根っからの悪人で犯罪が癖になっているからだ、とだけ思っていた。しかし、出所し更生の道を歩みたくても、社会の厳しい目が大きな壁となっていることを知った。世間から受け入れられないことで働くこともできず、生活費のため再犯してしまう人もいるそうだ。罪を犯す人だけでなく、私が抱いていたような偏見も問題なのだと思った。

被害者が加害者へと転じないように、傷つき苦しんでいる人を救える社会。そして、もし罪を犯したとしても、出所後には受け入れてもらえる社会。そんな、誰にとっても受け皿となるような社会に、どうすれば変わっていけるのだろう。自分にとっての身近な社会、学校のクラスに置き換えて考えてみた。

いじめ問題が起きたとする。まず加害者の立場で考えた。加害者になる前に寂しい思いをしていた。そしていじめをして腹いせをした。問題になり、いじめを反省したとしても、多くのクラスメイトは怖い人、関わるとろくでもない人、自分とは関係ない人としか見てくれない。厄介者のレッテルを貼られ輪に入れない。孤独から、また問題を起こすかもしれない。そうするとやっぱり悪い人だと決めつけられ、孤立する。加害者はいつまでもクラスの一員には戻れないのだ。次に、被害者の立場を考えた。どんなに加害者が反省しても許せない、同じ目にあわせてやりたい、目の前から消えてほしい。加害者がクラスに居続けること、また周囲も無関心を装うことに怒りがこみ上げる。そんな思いから、被害者が加害者へと転じて

しまうかもしれない。

ここまで考えて、クラスメイトが無関心ではいけないと思った。いじめも、周囲の無関心さが原因の一つであり、クラスの皆が互いに繋がりを作れていけば防げたかもしれない。また、もしいじめが起きたとしても、当事者だけの問題とせず、クラス全体で原因を考え、立ち直りを支えることで、クラスという社会が全員にとっての受け皿となる。人との温かな繋がりから、加害者は他人の気持ちも汲み取れるようになり、被害者のやり場のない思いや怒りも救えるはずだ。そして、加害者が正しい道を歩もうと努力し続けることが、被害者に対する唯一の償いにもなると思う。

社会の中で傷ついている人たちは、温かな社会の繋がりでしか救えない。そのため、偏見を捨てたり、周囲と積極的に関係を築いたりする必要がある。社会に属する私たち一人一人が変わっていけば、犯罪や再犯を防ぎ、支え合える社会へと変わっていくはずだ。

私は今、地域の行事に参加するようにしている。地域の方と声を掛け合い活動するのは、勇気が必要だったが、地域の課題も見えてきた。フードバンクのボランティアでは、様々な事情で困っている家庭があると知り、一人じゃないよという励ましのメッセージと共に食品を詰め込んだ。また、ブルースティックを部活の仲間に紹介した。汚れがよく落ちるということと、もちろん、刑務所で作られているということも伝えた。わずかな力かもしれないが、私の活動が少しでも社会を変える助けになれたら嬉しい。

今日も汚れたウエアをブルースティックでこすった。変わるきっかけをくれたこの石鹸に感謝の気持ちを込めて、大事に使っている。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

地域の宝

長崎県島原市立第一中学校　三年　島田（しまだ）　典明（のりあき）

僕には悩みがあります。それは、「こんにちは。」

「おかえりー。今学校の帰りね。」

下校中、近所のおばちゃんにつかまり、長い時はその場で三十分ほどおしゃべりをすること。そのせいで慌てて家に帰る羽目になるのに、話が楽しいから性懲りもなくまたつかまることです。

「こんにちは」と挨拶をすれば「おかえりー」と返してくれる。これが僕にとっての日常で、当たり前のことだと思っていました。このような地域で育った僕は、日々報道される少年事件のニュースを見て違和感を持つことがあります。よく地域の人のコメントで

「そういう子には見えなかった。」

「最近は、姿も見かけなかった。」

というコメントが見られることです。連日姿も見かけないとなれば、僕の近所では大騒ぎです。

なぜこういったことが起きるのでしょうか。よく、「罪を犯した人＝悪い人」のように言われます。この子も俗にいう「悪い人」だったのでしょうか。僕はそう思いません。

僕の手元に一冊の詩集があります。全編、受刑

中の少年達によって少年院で書かれた詩集です。そこには世間のイメージとは全く違う、少年たちの心が映されていました。例えば、これは「強がり」という詩の一節です。

「わたしは時に強がって生きてしまう。
本当はものすごく辛くて苦しいのに…
本当は周りの人たちに甘えたいのに…」

この子がどんな罪を犯したのか、僕には知るよしもありません。しかし、自分の弱さと戦いながら誠実に生きていこうとする心は痛いほど伝わってきます。望んで罪を犯した子なんていない。確かに、非は少年にもあります。しかし、それ以上に自分だけではどうにもならない「環境」があり、それに縛られたことで彼らは罪に走ってしまったのではないでしょうか。もし、この子に誰かが親身になって声をかけていたら。変化に気づけていたら。彼らが罪を犯すことはなかったのかもしれません。

日本には罪を犯した人の立ち直りを支える組織があります。それは「保護司」と呼ばれる民間ボランティア。全国に約四万七千人、長崎県には八百人近くいらっしゃいます。犯罪や非行をした人が刑務所や少年院から出所した時、住居や就職の相談に乗り、社会復帰を支えるなどの活動をされています。

「社会を明るくする運動」弁論大会に出場した時、僕はたくさんの保護司さんに会い、声をかけていただきました。中には僕の友人のおばあさんもいて、僕は初めて知った保護司という仕事に、温かさと親近感を覚えました。

罪を犯した人の立ち直りを支える地域の柱として活躍される保護司さん。では、僕にできることは何だろうと考えると、案外身近なところにヒントがあると気づきました。それは、地域のおばちゃんのまねです。地域のおばちゃん達がされていることは、挨拶をすること、そして相手に心を寄せ、おしゃべりをすることです。

これだけ？と拍子抜けする方もいると思いま

す。しかし、ＳＮＳの発展に伴い対面で話す機会が少なくなった今だからこそ、実際に生の声で話すことは本当に心を軽く出来ると思うのです。僕達はラインでいつでも連絡を取れます。でも実際に会って目を見て話し、一緒に笑い合えることが一番楽しいです。

生徒会役員になったばかりの頃、責任の重い仕事を任されたものの、自信もなく先の見通しも立たず、一人、自分の殻にこもって悩んでいた時、

「おばちゃんが学生んときは一学年に九クラスもあったのよ。」

と畑のあぜ道で幾度となく聞いてきた他愛もない会話一つで、気が楽になり、曇っていた心が徐々に晴れていくのを感じました。悩みや不安でがんじがらめになっている時ほど、人に話を聞いてもらうことは救いにも支えにもなると僕は思います。

保護司さんのような大きな活動は、今の僕にはまだできません。でも、日常のささやかな行動で、明るい社会の草の根を担うことはできます。

挨拶と会話。これは、僕を温かくのびのびと育んでくれた地域の宝です。この宝を僕も引き継ぎ、実践していきたい。そして、僕の姿を通してこう言いたい。

「あなたは一人じゃない。共に、生きていこう。」

小学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

社会を明るくするために

千葉県君津市立清和小学校　六年　落合（おちあい）　悠翔（はると）

「社会を明るくするためには、どうしたら良いと思う。」と、お母さんに聞いてみました。すると、「明かりだね。」と言いました。ぼくが、そういうことじゃなくて、と言うと、「人が見ていないような暗い場所って、犯罪が増えるよね。人の心の中も同じなんじゃないのかな。」とお母さんが言いました。ぼくはこの話を聞いて、あることを思い出しました。一学期のことです。ぼくは、学校で友達をつねってしまいました。今まで、その友達からいやなことをされても、自分の方が年上だからがまんしなければいけないと思っていました。何度も注意したけれどやめてもらえず、くやしい気持ちでいたけれど、その子が年下だから仕方ないと思っていました。でも、その日は今までのことが思い出されて、とうとうがまんできなくなり、やり返してしまいました。やり返しても、ぼくの気持ちはすっきりすることはありませんでした。すぐに謝ったけれど、それでもぼくの気持ちはすっきりせず、自分でもよくわからない悲しい気持ちになりました。意地悪をされた時よりも、心が何倍も痛くなりました。そして、自分の頭の中が真っ暗になりました。

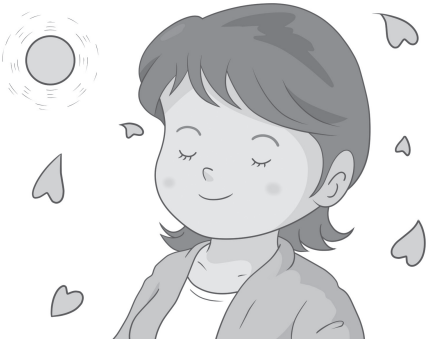
ぼく達の事を見ていた別の友達が、先生を呼んできてくれました。先生はぼくの話をていねいに聴いてくれました。ぼくのことを怒るのではなく、何があったのか、どんな気持ちだったのかを時間をかけて聴いてくれました。怒られると思っていたぼくは、先生がそうしてくれたことで余計に、自分が大変なことをしてしまったんだと感じ、もう絶対にこんなことはしてはいけないと思いました。そして、真っ暗だった頭の中は、カーテンを開けた時のように明るくなり、少しずつ悲しい気持ちも落ち着きました。先生との話が終わり、ぼくは授業に戻ることになりました。家庭科の授業が始まっていたので、クラスの友達はその間ぼくがいなかったことを知っているし、なぜぼくがいないかも、みんな知っています。きっとみんな、ぼくが悪い事をしたから、先生に怒られているのだと思っているのだろうと思うと、教室に入るのが嫌でした。でも、いざ教室に入ると、「悠翔、早くこっちに来なよ。」「最後の一つ、食べて良いよ。」と、みんなはぼくをいつもどおりの様子で、明るく迎え入れてくれました。その事で、ぼくの心はすっと軽くなり、頭の中はさらに、明かりが灯ったように明るく、温かい気持ちになりました。

ぼくは、お母さんの話と自分が体験した出来事を通して、こんな事を考えました。人は、自分に向き合って気にかけてくれる人がいる事で、自分がした事をふり返る事ができるのではないかという事、そして、もし何かまちがった事をしてしまったとしても、温かく迎え入れてくれる人や場所があることで、自分も優しい気持ちになり、またがんばろうと思えるのではないかということです。そしてそれは、真っ暗になっていたぼくの頭の中が明るくなったように、人の心の中につく明かりのようなものだと思います。もし、ぼくが悪い事をしてしまった時に、先生から理由も聞かれずに怒られていたら。もし、クラスのみんなが明るく迎えてくれなかったら。きっと、ぼくは自分

のやった事を素直に反省する事ができなかったかもしれないし、反省してもいつまでも、もやもやした気持ちでどうしたら良いかわからなかったかもしれません。いつまでも心や頭の中が真っ暗で、友達とまた仲良く遊べるようにならなかったかもしれません。先生やみんなが、ぼくの心を明るく照らしてくれたから、今までどおり毎日楽しく学校に通えているのだと思います。

だから、このように人の心を明るく照らす事ができれば、いじめや犯罪は減るのではないかと考えました。そして、もし悪い事をしてしまったとしても、反省して同じ事をくり返す事も防げるのではないかと思います。

ぼくも、そんな明かりの灯せるような人になって、いじめや犯罪のない世の中をつくる一員になりたいと思います。



小学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

お兄ちゃんの居場所

兵庫県加古川市立若宮小学校　六年　谷口（たにぐち）　寧音（ねね）

私は親族に、年のはなれた優しくて明るい大好きなお兄ちゃんがいる。

お兄ちゃんは、小学校では人気者タイプで運動神経が良い人だった。母に話を聞くと、私が小さかったころに、おんぶやそい寝をしてくれていたらしい。

しかしお兄ちゃんは、甘えられる人がいなかったのだ。お兄ちゃんのお母さんは、はなれて暮らしていたため、おばあちゃんが母親代わりだった。しかし、病気で車いすの生活になってしまった。

そして中学になったころ、自分と境遇の似た友達ができ、お兄ちゃんは、学校をさぼったり、夜遊びをしたりするようになっていった。

お兄ちゃんが帰って来ないことを心配して親族が探し回り、やっと見つけたと思えば逃げてしまう。私の母は気が気でなく眠れなかった日もあったと話していた。

中学二年生の夏、友達が盗んでしまったバイクで買い物に行こうとした時、警察官に呼び止められたことがきっかけで、お兄ちゃんは『児童自立支援施設』で暮らすようになった。そこは、家庭的なふん囲気の中で不良行いを行ったか、行うおそれのある児童が共に生活し、育ちなおしをする施設である。

そこでは勉強や運動をがんばっていた。特に、文化祭で「窓の外には」という合唱曲を手話付きで、本当に一生けん命に歌っていて母は心から「よかったー」と泣いたそうだ。

窓の外には、っていったいどんな曲だろう、と思い聴いてみると、心にしみこむとても良い曲だった。さらに「愛の中には心がある　優しい心がそばにある」という歌詞がお兄ちゃんと重なって、お兄ちゃんが頭に浮かんで自然と、涙がこぼれた。

そこから、お兄ちゃんは無事に高校に進学し、新生活をむかえることができた。それなのに、過去の自分がうわさ話になってしまい学校に居場所をなくしてしまった。あんなに優しくて面白いお兄ちゃんなのに。過去だけを見て、今のお兄ちゃんを想像だけで決めつけるのは、あまりにも辛くて悲しい。

お兄ちゃんには、父や兄弟もいて、おじいちゃんおばあちゃんなどの心配してくれる親族もいたけれど、困ったときに相談できる心の居場所がなかったのかもしれない。そう思った時、私は少しだけでもお兄ちゃんの居場所になりたかったなと後悔した。

でも、絶対に一人になることはなかった。いろんな方々がお兄ちゃんを支えてくれたからだ。お兄ちゃんを呼び止めて「この子は必ず更生できる」と言ってくれた警察官の方。お兄ちゃんの生活を支えてくれた施設の職員さんや先生。就職活動を後押ししてくれた方々が居場所をあたえてくれた。

今、お兄ちゃんはすてきな奥さんと結婚して幸せに暮らしている。

奥さんとの旅行や県外の出張などでどこかに行った時は、おじいちゃんとおばあちゃんにお土産を持って会いに来てくれる。

このお兄ちゃんの話を母からすべて聞き終わった後、私は「お兄ちゃんに居場所をあたえてくれた方々のようになりたい。」と強く思った。なぜなら、思いこみをしていないからだ。

確かに、罪を犯し、社会にめいわくをかけるのは良くないことだと思う。しかしその方々は、更生して新たに人生を再スタートしようとしている。そんな方々のために私たちは、居場所をつくっていく必要があるのではないだろうか。

小学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

明るい学校へ

愛媛県愛南町立城辺小学校　六年　岡下（おかした）　光葉（みつば）

『みんなはひとりのために、ひとりはみんなのために』これは、私たちの学校の校訓です。とても覚えやすく、一人一人の心に響くこの校訓がみんな大好きです。

先日、この校訓と合わせて考えたい授業がありました。その授業は、「社会を明るくする運動学習会」でした。授業の中で、講師の先生から一つの質問がありました。

「罪を犯して少年院に入っていた人が、この学校に転校してきたら、みんなは関わりますか、関わりませんか。」

これまでに考えたこともないような質問で、正直、私はとても動ようしました。私の出した結論は、関わらないです。理由は、その人はやってはいけないことをしたわけだから、少しこわいし、私たちも何かをされるかもしれないと思ったからです。私たちのクラスの三十人は、関わる、関わらない、ほぼ同じくらいの人数に分かれて、みんなで話をしました。関わると考える人たちの理由は、その人が新しい学校で一人になるのはかわいそうだという理由や、少年院から出てきてもう反省しているからなどの理由でした。私が特に納得

したのは、どんな理由であっても、その人と関わらないようにするのは差別だと思うという意見です。それを聞いて、私も差別は絶対にだめだと思うので、私も関わるという意見に変えました。

議論を通し、私たちのクラスでは一つの結論を出しました。それは、『人を尊重する気持ちを持ち、その人の立場を考えて偏見をなくし、優しい関わりをする』です。この結論が出た時に、自分にも偏見の気持ちがあったことに気付きました。偏見をなくす、人権を尊重する、相手の気持ちを考えるということができなくなった時に、人はいやな気持ちになったり、ストレスを感じたりします。そのストレスがたまった状態が続くと、いじめなどにもつながっていくのだと思います。

私は、この学習会を通し、差別について学び、考えることができました。差別やいじめがなくなり、みんなが明るく楽しい学校生活を送ることができるようになってほしいと思いました。

私たちは学校の最高学年です。学級担任の先生から、「最高学年がどう行動するかで学校は変わる。」と言われることがあります。私は、みんなが楽しく、明日も来たいと思える学校になってほしいと思っています。そのために、私は、休み時間に一人でいる友達がいたら自分から話しかけることを大切にしています。また、友達のいやなことを言っている人がいたら、それを止められる人になりたいと思っています。困っている人や悩んでいる人に気付き、一緒になって考え、行動できる人になりたいと思います。『ひとりはみんなのために、みんなはひとりのために』小さなことの積み重ねで明るい学校にしていきたいと思います。そうして、社会を明るくする運動にこうけんしていこうと強く思いました。

中学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

非行・犯罪について私が思うこと

北海道北広島市立東部中学校　二年　加藤（かとう）　愛理（あいり）

今回の作文のテーマは、他のお知らせプリントと一緒にたまたま母の目に留まることになった。そして、それを見た母がこんなふうにつぶやいた。

「私も学生時代に、同じようなテーマで作文を書いたことがあったな…。」

それをきっかけに、母の学生時代の頃の不良や非行・いじめ問題などについてしばらく雑談に付き合わされることになったが、そのうち私はふとあることに気がついた。

要するにこの問題は今始まったものではなく、少なくとも母が若かった頃から現代に至るまで、ずっと社会問題であり続けているのである。だとすれば、そのような難しい問題を平凡な中学生である私なんかが考えて本当に意味があるのかと疑問に感じてしまった。しかも、一応私は品行方正な学生のつもりであり、おそらくこの先も非行とは縁がなさそうである。

そこで、私はその時感じた気持ちを正直に母に伝えてみた。すると母は少しだけ考えてからこう言った。

「愛理のように『どうせ自分には解決できない』

とか、『自分には関係ない』とか言っている人が多いと、この問題はいつまでたっても解決しそうにないね。」

私は母のこの言葉に妙に説得力を感じてしまった。そして、この問題について少しだけ真剣に考えてみようと思った。

まず最初に、インターネットで関連するサイトを片っ端から見て周り、非行の定義や種類、非行と犯罪の関係などを調べてみた。ユーチューブ以外でこんなにパソコンと向きあったのは初めてだったかもしれない。

色々調べてみて分かったことは、非行にはとても沢山の種類や事例があり、仮に代表的な万引き一つをとってみても、犯罪をするに至る理由や経緯には様々なケースがあるということだった。

中でも私の目を引いたのは、まず非行や犯罪を犯す人の特徴として、少年期に家庭環境に恵まれないケースが非常に多いということだった。

私にとって、家はこの世で一番やすらげる場所である。仮に何かで落ち込むことがあっても家に帰れば心をいやして立ち直ることができる。家とはそういう場所のはずである。

しかし、一部の子供達にとって、家がそういう場所でないという事実を知り私は大きな衝撃を受けた。そして改めて自分がとても恵まれた環境にいるのだということを感じることができた。特に一番頼りにすべき両親に問題がある子供達のことを考えると、何とか今すぐにでも社会全体で救いの手を差し伸べることができないかと強く感じた。

家庭で大切にしてもらえない子供達がいることは大変悲しい事実だと思うが、友達や先生、愛する人など自分のことを真剣に考えてくれる人との心と心のつながりがあれば、非行や犯罪の防止になると感じたので、地域を上げてできるところから取り組んでいけばよいと思う。

次に私が注目したのは、非行や犯罪は再犯率が非常に高いということである。その原因は沢山あ

るが、特に目についたのは働く場所や住む場所がないということだ。これは、社会全体が犯罪経験者に対して非常に冷たいということなのだと思う。

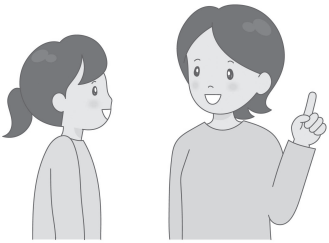
そういう私も、犯罪を犯したことのある人と普通に付き合えるかわからない。本当に改心したかどうか、人の心の中はのぞき見ることができないからだ。しかし、そんな社会の疑いの目が、折角一からやり直そうとしている人達の心をくじいてしまうのではないかと思われた。

私は、出所者を一定期間雇ったり、住むところを提供するなど、社会とのつながりや生活を支援することが必要だと思う。そうやって社会にうまく溶け込み、社会に貢献した実績が犯罪経験者の自信となり、再犯の防止につながるのではないかと考えた。

今回私が非行や犯罪について真剣に考えることができたのは、母との平凡な日常会話がきっかけだった。家庭内での何気ない会話は意外に大切なものだと改めて実感することができた。

最後にこのテーマは、非常に大きな社会問題なので、短期間にまとめて解決することは不可能であると実感できた。私たち社会全体で継続的に取り組み、少しずつ改善していく姿勢が大切であると思った。

これからも、機会があれば社会問題について色々調べたり考えたりしてみたいと思う。



中学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

私達が見るべきもの

東京都昭島市立昭和中学校　二年　髙瀬（たかせ）　萌衣（めい）

私の母は医療少年院へ医療器具を運ぶお仕事をしている。そんな母が、時々すれ違う子供達はとても悪い人には見えないそうだ。私達と彼らの違い、それは何なのだろう。

万引き。決して許されない行為。しかしとある番組を見て私の考えは少し変わった。

昨年のある日の夕食。いつもご飯の際は消しているはずのテレビが、その日はついていた。気になって、流れている番組を見てみた。それは、非行に走る少年達を捕えるという内容だった。夜中のコンビニ。そこには、私と変わらぬ年齢の子供達がいた。お店から出てくる子供が皆、ポケットやバッグに商品を隠している。その異様な光景に私は目を疑った。そんな子供達の中に一人だけ何かが違う子が混ざっていた。まとう空気感が何だか違う。警察はその子に注目をして、話し合いが行われることになった。万引きした商品は、三個入りのクリームパンと水。公園でたむろでもして食べるつもりなのだろうか。私の浅はかな考察はすぐに打ちくだかれた。生きるためだった。その子は生きるためにぬすんでいた。警察は、商品を見るなり家族構成について質問をしていた。母親と弟、妹が一人ずつ。毎日遅くまで遊んで帰って来ない母親。まだ一人では出来ないことが多い幼

い弟達を養うためには、その子が万引きをしてでも食べ物を確保するしかなかった。生きていくためにぬすむしかなかった。私と同い年くらいの子が毎日、生きるか死ぬかの戦いをしていた。信じられない話に息苦しさを覚えた。番組は結局、その子の万引きを咎めた後、児童相談所の話をして終わった。手の付けられなかった夕食を食べ終え、色々と支度をしてからベッドに寝転んだ。でも、どうしてもあの子の全てを諦めたような目が頭から離れなかった。万引きは許されない行為。悲しむ人が現れるいけないこと。しかし私達にあの少年を責める権利はあるのだろうか。おなかが空いて苦しむ人に向かって言えるだろうか。万引きという非行に走る原因は果たしてあの子にあったのだろうか。考えれば考えるほど、深い闇におおわれるように分からなくなっていった。もちろん、非行に走る人達みんなにそのような背景がある訳ではない。スリルがあるから、仲間にほめられたいから、楽しいから、そんな理由もあるだろう。そういう人達にはしっかりと然るべき対応をするべきだろう。ただ、今回のような時にはまず、その子のもつ不安や悩みを取り除かなければならないと私は思った。

今まで私が抱いていた非行少年へのイメージ、万引きへの意識は、今回のことで少し変わった。母が見た少年達の中には、きっと今回のような子も混ざっていたのだろう。彼らと私達の間には、大きいようで小さい、厚いようで薄い壁が立っている。その壁を打ち破り、手を差し伸べることが出来れば非行は少し減ると思う。今の日本には、幼い子供達を助ける手段がほとんどない。そして関係ないと、非行から目を背けてきた私達も彼らからしたら敵なのかもしれない。社会全体を明るくしようだなんて、そんな大それたことは私には出来ない。でも、非行について知り、周りと共有し、ちょっとずつ非行への意識を変えることが出来たなら、いつの日か社会全体が明るくなるかもしれない。私は、その明るさへの第一歩を踏み出せる、そんな人間になりたい。

中学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

「矢印」

福井県越前市武生第二中学校　二年　川本（かわもと）　一翠（いすい）

「社会を明るくする」

なぜ、こんな言葉を使うのだろう。ずっと気になっていた。「犯罪予防」といった言葉の方がずっと分かりやすいし、活動内容がとても理解しやすい。ずっともやもやしていた。保護司をしている祖母が「犯罪者予防更生法」が施行されたことがきっかけで始まった活動であると教えてくれた。戦後の荒廃した中にあって、かねてから街にあふれた子供たちの将来を危惧していた東京・銀座の商店街の有志が、この法律の思想に共鳴し、昭和二十四年七月十三日から一週間にわたって、自発的に「犯罪者予防更生法実施記念フェアー（銀座フェアー）」を開催したことが前身であると教えてくれた。

私の心がとても動いた。

法務省を主体に行っている現在の活動の原点が、民間の活動にあった。しかも自発的に。この意味は一体何か。戦後の混乱期であったはずの社会が、犯罪に手を染めねばならないまでに追い詰められた「個人」を全力で守ろうとしていた活動。完全に復興していたわけではない時期に始まった活動。これは、本当に「社会」を、いやもっと根

本的に「人」を救おうとする活動だったんだ。

保護司自体も、国家公務員の身分を与えられているとはいえ、ボランティアの活動であることを祖母を通じて見てきた。祖母は、無償であっても、当たり前に担当の方とのお話に出かけていくし、保護司会で開催される研修にも出かけていく。自分で心理学の資格も取得した。七十年以上も続いている活動を、祖母を含め、多くの人が守り続けているのだ。

小学生の時に私が泣いている絵を描いたことがある。学校で私の眼鏡が壊された日だ。姉が、その絵に矢印をつけて、「一翠が泣いていたら、逆に笑ってみせる」というおかしなことを書いた。私が不満そうな顔をしたのもあったのかもしれないが、その後に、「お母さんに言えないことを聞いてあげる」「全力で守る」そんなことを書き足していった。通りかかった母は、ちょっと心配した顔で「一翠が一番大事であることをずっと言い続ける」と書いた。祖母も、「一翠が話をしたくなるまでずっとそばにいる」と書いた。おかしなことになっていって、笑っていたけれど、本当はなんだか涙が出そうだった。

そのことを思い出して、一人で、カレンダーの裏に同じように書いてみた。家族に相談をしよう。困っている人がいたら声をかけよう。差別されている人はいないか。自分でできなかったら、助けてくれる場所を教えてあげよう。自分を中心にして、矢印を書きながら、できることを書いていったら、大きな図になった。別に、社会を明るくする運動だけではない。私の学校でも、あいさつの運動等、人をつなげようとする活動がある。一人にしない活動がある。部活動もそうだ。町内会もそうだ。それぞれは小さな動きかもしれないけれど、それが大きな「社会」に繋がっていくんだ。矢印は、ずっとずっと大きくなって、カレンダーの裏はびっしり埋まった。どんどん大きなことになっていった。楽しかったし、とてつもなく大きな変化を起こせるような気持ちにもなった。

書き終わった私は、よく分からない充実感で矢印をなぞっていった。矢印の大きな外側にたどりつくまでに、中心の私のような人が救われるといいな。そう思った。その思いが私の中に来た途端、外向きの矢印は、その中心に向かう小さな私に向かう矢印に変わったような気がした。鉛筆の矢印の色が明るく変わったような気がした。確かに、嫌なことがあると、心から真っ黒になる。ノートを塗りつぶすように、じわじわと広がる気持ちを抑えられなくなることもある。手をぐっと強く握って自分の心をどうにか戻そうとしてみるのだけど、どうしても戻らないことがある。これがどんどん時間が長くなると、もっと大きなことをしても、自分の心を守れなくなるのだと思った。この時にどうしたらいいんだろう。だれかに話を聞いてほしい。助けてほしい。そういう方法を持っている人と知っている人の違いなんだろうなと思った。

祖母はいつもいう。犯罪を犯してしまうということは、社会がどこかおかしいということなんだと。担当している方は私はお会いすることはないけれど、本当に悪い人はいないのだといつも祖母はいう。帰る場所があるか、働く場所があるか、相談できる人はいるのか、友達がいるか、関わる人が多ければ、その方の未来は開けていく。必要な人が増えるほど、未来は確実になる。その矢印が多ければ多いほど、その社会は大きく、明るく、輝いていく。戦後の混乱期に既に生まれていた活動。今までも、まさに今も、そして、これからも、多くの人が、社会につながる大切な一人一人のために活動をしている。私も一員になりたい。そう思った。これからも続く明るい社会の一員になるんだ。そう心から思った。

小学生の部

日本更生保護女性連盟理事長賞（優秀賞）

ブックカバーが教えてくれたこと

兵庫県三田市立武庫小学校　六年　苅谷（かりたに）　はづき

私にはお気に入りのブックカバーがあります。家族で行ったショッピングモールで開かれていた「刑務所作業品販売会」と言うイベントで母に買ってもらったものです。「刑務所作業品」と聞いてもどういうものなのか私にはよくわかりませんでした。母にきいてみると罪を犯した人が刑務所の中で作っているものだと言いました。罪を犯してしまった人たちが作っているなんて、少し怖いと思ってしまいました。しかし、きれいな生地でとても丁寧に作られているそのブックカバーを手にしたとき、そんなことは思わなくなっていました。

家に帰ってからも「刑務所作業製品」が気になり、刑務所でどんな作業をしているのかを調べました。そして、なぜそんなことをしているのかを知ることができました。作業で稼いだお金は、その人が刑務所を出たときに自分の力で暮らしていくためのものだということです。そして、新しく仕事を始めるために技術を身に付けているということです。また、「刑務所作業品」の売上の一部は犯罪被害者の支援になることも知りました。

罪を犯した人がその罪を償って社会に戻ってきたとき、再び犯罪を犯さないことはとても大切なことです。そのためには、自分の力で自分の生活

を作ることがその人にとって必要なことなのだと思います。

私は、このブックカバーを手に取るたびに、これを作った人はなぜ悪いことをしてしまったのだろうという疑問を持つようになりました。生まれた時から悪い人なんていません。大人になる途中で何かあったに違いないのです。犯罪や非行を犯してしまった人には、今の私には想像もできないような事情があったのかもしれません。そして、そのことを相談できる家族や友だちがいなかったのではないでしょうか。私は孤独な人が、犯罪や非行をしてしまうのではないかと思います。私には、毎日「おはよう」のあいさつをしてくれる地域のボランティアさん、悩んだ時の相談に乗ってくれる友だちがたくさんいます。このブックカバーを作った人には、小さな悩みを打ち明けたり、腹が立ったことを吐き出したりする人がいなかったのか、しんどい時にそばに寄り添う人がいなかったのかと想像します。

今の私に犯罪をなくすために何ができるのかと考えても答えは出ません。しかし、一人ぼっちで悩んでいる人、困っている人を減らすことができたら、そののち犯してしまう犯罪や非行が減るのではないかと思います。一人一人が周りの人を気遣い、声掛けをしていくことができたら社会は変わると思います。悩んでいる人や困っている人が孤独にならないように、声を掛け見守る地域をつくることが大切だと思います。きっとそんな子供時代を送った記憶のある人は、非行に走ったり犯罪を犯したりするはずがないでしょう。

犯罪を犯した人がきちんと罰を受けこの社会に戻ってきたら、「怖い人」「また悪いことをするにちがいない」と決めつけてしまうことは、差別やいじめと同じであると思います。犯罪を犯した「人」ではなく、犯罪を犯してしまう「環境」にその原因があったのではないだろうかと、しっかりと考えていきたいと思います。このブックカバーを作った人に立ち上がるチャンスを与えられる社会。それが明るい社会につながるのではないでしょうか。そんなあたたかい社会になるように、考え続けたいと思います。

小学生の部

日本更生保護女性連盟理事長賞（優秀賞）

誰もが誰かの支えになる社会を

和歌山県和歌山大学教育学部附属小学校　五年　丸山（まるやま）　清良（せいら）

きっかけはささいなことだった。

一ヶ月ほど前、やらなくてはならない習い事の練習のことを母に指摘されたのに、私は行動に移すこともなく、受け答えもせずダラダラ過ごしていた。一度や二度のことで母はきつく叱ったりはしない。でも、最近の度重なる悪い態度を、母も見かねていたのだろう。

「やる、やらないは別にして、せめて返事くらいはしなさい。」

と注意され、私は頭に血が上ってしまった。

「言われなくても分かってるよ。」

乱暴に口答えし、思わずそばに立っている母に手を出してしまった。私は、叩いたり暴力をふるったりしようと思っていたわけじゃない。ただ無性に腹が立ち、ほんの少し攻撃的な感情が芽生え、母の手を振り払いたくなってしまっただけだった。ブチッ。しまった、と思った時にはもう遅かった。私の手が母の洋服に引っかかったはずみで、服の襟元を引きちぎってしまったのだった。

情けないことに、その後がさらに良くなかった。すぐに謝るべきなのに、パニック状態になった私はひどい言葉を母に投げつけた。

「やろうと思ってやったわけじゃないもん。」
今、こうして文章にしてみると、自分に対する嫌悪感でいっぱいになる。冷静になってみれば、私の言動のどこをどう見ても、正当な部分はない。返事をしない、反抗的な態度、素直に非を認めることができない。どれも、ほめられるような行いではなかった。

よく考えてみると、この時私がしでかしたことは、相手が家族じゃなかったら大ごとになっていたかもしれないようなことだ。もしも、いらつく心を抑えられず学校でこんな言動を取ってしまったら、あるいは、登下校中の横断歩道でついカッとなってしまったら、一体どうなるだろう。犯罪や非行に自分が関わることはない、と思い込んできたが、自分の中の負の感情が暴走してしまった際に、重大な事故や事件を引き起こしてしまうことだってあるんだ、という怖さに私は気がついた。

誰だって心が荒んでいる時がある。でも、だからといって、皆が皆、罪を犯してしまうわけではない。そんなささくれ立った心を和らげてくれるものは何なのだろうか。

母とのいさかいの後、祖母と電話で話した。

「お母さんから聞いたで。気持ちにまかせて突っ走らんと、一回立ち止まって深呼吸するのが大事やな。返事もちゃんとしような。でも、理由は分からんけどイライラする、そんな時期は誰にでもあるもんや。」

祖母の穏やかな声を聞いて、とげとげしていた私の心はすうっと静まった。そして、自分の過ちを認め、母にちゃんと謝ろう、と決心した。私以外の誰かが、だめな私のありのままを優しく受け入れてくれたおかげで、私は自分の失敗を素直に認めようと思えたのだ。

私たちが、明るい社会生活を送ることができるのは、自分の存在を認めてくれる人たちがそばにいて支えてくれるからだ。一人一人が取り巻く人間関係はごく小さなものだけれど、それらの小さ

な輪が集まり重なり合って平和な地域社会が形作られている。

また、過ちを犯してしまった時、罪自体を消し去ることはできないが、まずは罪と向き合い反省することが何よりも大切だ。自分の犯した間違いを本心から受け入れることこそが、更生に向けての第一歩だと思う。間違った行いをしてしまったからといって、自暴自棄になってしまったら、そこからは何も生まれない。まずは落ち着いて、間違いから目を背けず反省することができれば、きっと立ち直ることができると思う。でも、それは、一人では難しい。私にとっての祖母のような、自分に寄り添ってくれる誰かの存在が必要だ。

ここで問題になるのが、そのような人は誰でも良いわけではないところだと思う。安心して自分の悪いところをもさらけ出せる相手がいてほしい。そのためには、日頃からの周りの人たちとの関わり合いが大切だろう。誰かと直接会って言葉を交わし心を通わせる、そんな何気ない日々から生まれる信頼関係が、いざという時に支え合える、明るい社会の基盤になってくれるのだと私は考える。

母は、誰よりも私を気にかけ大事に思ってくれているからこそ、私の改めるべき問題点を示してくれた。にもかかわらず、私の独りよがりな言動のせいで母を傷つけてしまった。苦言を呈してくれる人もまた、自分を支えてくれる大切な存在だ。今回の出来事を経て、私のすぐそばで親身に寄り添ってくれる人たちの有り難さに気づくことができた。

罪を犯した人が、自らを支えてくれる人と出会えるような幸せな社会であってほしいと心から願う。私も、いつか誰かの支えとなれる大人になるために、この夏の失敗を決して忘れず、もっともっと成長していきたい。

小学生の部

日本更生保護女性連盟理事長賞（優秀賞）

社会に僕ができること

熊本県熊本市立帯山小学校　五年　宮田（みやた）　晃成（こうせい）

僕のおじいちゃんは、富山に住んでいるお寺のお坊さんです。そして、おじいちゃんは、月に一回、ラジオ番組を放送しています。でもその放送は、一部の人達しか聞くことはできません。なぜかというと、悪いことをした人が入る刑務所の中だけの番組だからです。しかもボランティアで、四十四年間ずっと続けているそうです。その回ごとにテーマを決め、刑務所に入っている人達全員からメッセージやリクエスト曲を募集します。その中から、何人か選ばれたメッセージを紹介して、相談に乗ったり、前向きになれるような、よりそった言葉かけをしているそうです。でも、その話を聞いて僕は不思議でした。

「なんで悪いことをした人たちに優しくすることができるの？僕ならできないんだけど。」と言ったことがあります。おじいちゃんは、

「最初から悪い人なんていないんだよ。その人達なりの原因があるんだ。なぜこうなったのかを反省したり、これからどう生きていくか、目標や希望を見つけられたら必ず、社会復帰ができるんだよ。その手伝いをしているだけだよ。」

と、おだやかに教えてくれました。

刑務所内のラジオ放送の効果を僕も調べてみました。犯罪を犯した人達の教育に効果があるということで、最近は全国の刑務所でも行われていることがわかりました。自分のことをふりかえって、決められた字数で文を書くことも心の整理になることも知りました。それからお母さんにも意見を聞いてみました。

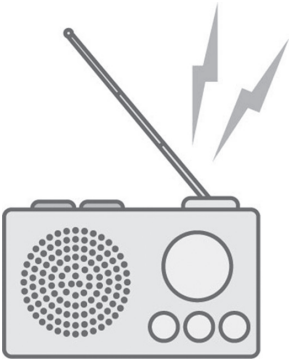
「もし自分の好きな番組に自分の書いたメッセージをだしたとして、それが放送されて、選ばれて読まれたら、晃成もうれしいでしょ？やったー、リアクションされた！って。そして優しい言葉や、よりそってくれるコメントを返してくれたら、よし頑張ろう！って、モチベーションにつながるよね。ちょっとした事が、心を変えるきっかけになることってあると思うよ。」

と教えてくれました。色々なことがわかって、改めておじいちゃんは、本当にすごい！と、心から思えました。こんなすごいことを、お金を一円ももらわずにボランティアでずっと四十四年も続けていることに尊敬しました。

今は、話したくても話せなかったり、心に不安や辛さをためて悩んでいる人が多いとメディアで聞いたことがあります。そんな人達を減らすことが犯罪を減らすことにつながると思います。それから僕は今の自分ができていることを考えてみました。僕がいつも一番心がけていることは、日頃から笑顔で明るくいることです。怒ったり落ち込んだりしていると、周りの人も辛くなってしまうからです。笑顔でいると自然に優しい気持ちになります。優しい気持ちでいると、喜ばれることをしたい、役に立ちたいという気持ちになります。だから、友達がケガをしてしまったら、すぐに対応して保健室につきそうようにしています。つきそってくれてありがとうと言われるとうれしくなります。そばにいることで不安な気持ちが少しなくなって、ほっとしてくれているのかなと思います。また、お母さんが毎日遅くまで仕事をしているので、洗たく物を取り込んだり、たたんだり、

お風呂を洗ったり、食卓を片付けたり、少しでも働いているお母さんの役に立てるように行動しています。「助かるよ、ありがとう」とうれしそうに笑ってくれるお母さんをみていると、僕も温かい気持ちになります。周りの人達がいい気分になることは、僕のいい気分にもつながっています。

今の僕には、おじいちゃんみたいな大きな事はできないけど、僕の今できていることが、社会を明るくする運動につながっていると信じています。そして、これからもどんどん自分が社会にできることを増やしていきたいです。



中学生の部

日本更生保護女性連盟理事長賞（優秀賞）

勇気の一言

宮城県東松島市立矢本第一中学校　二年　尾形（おがた）　柑南（かんな）

「どうしたのですか」

私はこの一言を掛けることができなかった。

今でも犯罪を止めたニュースを見ると胸が痛む。犯罪を止めた人は皆、「当たり前のことをしただけ」と言う。だが、私にはその「当たり前のこと」ができなかった。あと少しの勇気があれば、誤解だったとしても声を掛けていれば…。

母と二人で銀行に行ったとき、電話をしながらＡＴＭを操作している女性がいた。電話をしながらＡＴＭを使っている人は今までにも見たことがあったし、何より高齢者ではなかったため、家族と話しながら利用しているだけだと思っていた。それだけでなく、私の住んでいる街は平和だという思い込みから「自分たちの街で犯罪が起きるわけがない」とあまり気に留めていなかった。

「どこに振り込むの？」

「どのカードを使えば良いの？」

偶然耳に入った電話の内容。女性が少し焦っているように見えた。それに加えてＡＴＭを操作している時間が長く感じたため、私は母に声を掛けた。すると母も電話が聞こえていたらしく私たちは「詐欺」を疑った。

（これは本当に詐欺なのか）
（声を掛けるか…警察に通報するか…）
（誰かが見張っていて逆恨みされたらどうする）
（もし誤解だったら恥ずかしい）
祝日だったため銀行に職員の方がおらず、気軽に相談できる人もいない中、私は声を掛けるべきだと分かっていながらも女性に「どうしたのですか」と問うことができなかった。結局、声を掛けることができずに私たちは銀行から帰ってしまった。帰ってからも歯がゆい気持ちが続き、自分自身の行動に後悔が残った。

翌日も銀行での出来事がずっと気がかりでネットで詐欺の被害について調べたり、新聞を念入りに確認したりしていた。すると前日、銀行で詐欺があったという記事が載っていた。場所、時間、被害者の性別。全てが私たちが詐欺を疑った前日の銀行での様子とよく似ていた。勇気を出して声を掛けていたら…。

今考えると頼れる人は沢山いたと思う。特殊詐欺が増加していることは連日のニュースや銀行に貼られていたポスターによって十分に理解しているつもりだった。それにも関わらず、「自分には関係ない」と他人事でいた自分に憤りと責任を感じた。

私の住む宮城県の令和四年度特殊詐欺被害件数は三二三件。私が出くわした女性が詐欺の被害者だったのか定かではない。けれど、仮にあの女性が被害者だったら…。

「どうしたのですか」

この一言を掛けることができていれば、被害は三二二件に減ったのかもしれない。たった一件。そのたった一件で一人でも被害に遭う人が少なくなれば、笑顔で暮らせる人が増え、街はもっと平和になると思う。そのために自分ができることは「勇気」を持つこと。私には恥ずかしい、失敗したくない、と自分の意見を明確に言えない部分がある。だから、普段から勇気を持って相手に自分の思いを伝えられるようになりたい。

犯罪は被害を受けた人だけでなく、被害者、加

害者の家族、更には私のような目撃者など多くの人に悲しみや傷を負わせる。自分自身にも声を掛けることができなかった後悔が今も残り続けている。この後悔が残るからこそ、いつか同じような場面を見かけたときに例え誤解であったとしても「どうしたのですか」と「当たり前」に声を掛けられる人に必ず私はなる。

中学生の部

日本更生保護女性連盟理事長賞（優秀賞）

あの町が教えてくれた大切なもの

茨城県立並木中等教育学校　二年　田所（たどころ）　直幸（なおゆき）

「誰でもいいから人を殺してみたかった」。これは、僕が報道で目にした殺人事件を犯した人が口にした言葉です。このような僕には全く理解できない思いを持ち、殺人という重大な犯罪に走ってしまうのはなぜなのでしょうか。そして、そのような犯罪をなくすために、僕たちは何をすべきなのでしょうか。

僕は先日、父親が単身赴任する町に遊びに行きました。人口一万人ほどのその町には都会で当たり前に目にするファミリーレストランなどは一軒もありません。大きな町に鉄道を使って出るには、一時間に一本の電車を待たなければなりません。自分の住む町とは違うこの町の姿に、僕は最初戸惑いを感じました。しかし、すぐに自分の住む町にはない大切なものが存在することに気づきました。その大切なものとは、人と人との距離の近さです。例えば、町を歩いて人とすれ違うと、必ず「こんにちは」と笑顔であいさつをされます。また、食堂に入れば、お店の人が「どこから来たの」とにこやかな笑顔で声を掛けてくれます。さらに、農作業をするお年寄りを子供たちが楽しそうに手伝っています。この町に降り立って、初めはよそ

者と思われているのではないかと感じていた僕でしたが、いつの間にか、この町の人たちに受け入れられているような、そして不思議と温かい気持ちになりました。父親にそのことを話すと、父親から、「自分が子供の頃には、これが当たり前の日常だったのだよ」と教えてもらいました。そして、そのような環境で育った父親が子供の頃は、殺人事件などの報道はあまり目にすることがなかったとのことでした。

僕は、その後自分の住む町に帰ってから、ふと気になって殺人事件を犯した人たちのことを少し掘り下げて調べてみました。そうすると、そこにはある感情が共通して存在することに気づきました。その感情とは「孤独」です。例えば、ある殺人事件を犯した人は、ある事が原因で家族と離れ離れになってから全てがうまくいかなくなり、自暴自棄になったとのことでした。また、別の殺人事件を犯した人は、仕事で失敗して職場を解雇された後職業を転々とするうちに、次第に人との関わりが薄れ、自分は社会から必要とされていないと感じたとのことでした。

このような「孤独」という感情が殺人事件という重大事件を犯した人の心の奥底にあることを知った僕は、犯罪のない明るい社会を築くためのヒントが、父親の単身赴任先であるあの町の日常にあると考えました。人は誰でも、話し相手がいなければ「孤独」を感じると思います。道ですれ違うと「おはようございます」とあいさつをする、初めて見る顔の人に対しても当たり前のように笑顔で声をかけるといったあの町の日常は、残念ながら僕の住む町のような都会では非日常の光景に映ります。あいさつや声掛けは会話の入口であり、人と人との関わりのきっかけとなるものです。これを都会に住む人たちの間で、そして日本中の日常にすることができれば、人と人との距離の近い、人とのつながりが感じられる「孤独」を誰も感じることのない社会を創り上げることができると思います。

また、最近、犯罪被害者へのインターネット上での心ない書き込みやＳＮＳ上での誹謗中傷が社会問題となっています。標的にされた人の中には、心を痛め、自ら命を絶つケースも存在します。このような心無い行動をとる人たちもまた、「孤独」という感情を抱いているに違いありません。なぜなら、このような人たちは、現実世界から逃避し、人と会話する機会をインターネットやＳＮＳに求めていると感じるからです。それならば、同じような取り組みをしていけば、このような人たちを現実世界に引き戻すことは難しいことではないと考えます。

振り返ると、僕も、幼い頃から、両親や祖父、そして学校の先生などから、あいさつをすることの大切さを教えてもらいました。しかし、成長とともに次第に、そのような意識が薄らいできていたような気がします。あいさつするのが気恥ずかしくなり、困っている人を目にしたとき声を掛けることをちゅうちょしそうになる。そのようなことの繰り返しが、いつの間にか人と人との関わりの薄い社会にしてしまう原因となっているのではないかと、僕は自分自身のことを反省しました。

僕は今後、あの町が教えてくれたことを決して忘れず、誰一人として「孤独」を感じることのない社会を造り上げる力になりたいと思います。そのために僕が今できる「あいさつと声掛け」を実行し、それを社会の当たり前の日常につなげる努力をしていきたいと思います。なぜなら、きっとその先には、人が人を傷つけることのない、明るい笑顔あふれる日常が日本中に広がると考えるからです。

中学生の部

日本更生保護女性連盟理事長賞（優秀賞）

自分を支えてくれる人の存在

千葉県八千代市立大和田中学校　三年　和田（わだ）　明香里（あかり）

私は、中学一年生の十二月、学校に行きづらくなりました。明確な理由は、自分でも説明できないのですが、きっかけは、コロナだと思います。小学六年生の修学旅行がなくなったのは、とてもショックな出来事だったのと、次々と規制ばかりの世の中で私は不安でいっぱいでした。制限ばかりの世の中で、慣れない中学校生活が始まり、なんとか平静を装い一学期を過ごしましたが私の心は悲鳴をあげていました。とうとう「もう学校に行けない。」と私は親に告げました。休んでいる間色々なことを考えました。特に将来のことを考えると不安と焦りでいっぱいでした。

そのような中、当時の担任の先生は、毎日電話をかけてくれました。私は、先生にどんな話をすればよいのかわからなかったので、出ることができませんでした。母から聞くと、先生は毎日クラスの様子だったり、「困っているなら、何とかするし、何とかなるよ。」とおっしゃってくれたり、色々な提案をしてくれました。それは、とても心強かったです。

そのおかげで意を決して個人面談に行った時先生は、満面の笑みを浮べながら拍手をして喜んで

くれました。私は気恥ずかしいやら久しぶりやらで先生とは対照的にだんまりとしてしまいましたが心の中では、とても嬉しかったです。二泊三日のスキー教室に参加できた時も同様にすごくほめてくれました。また毎日こまめに体調を気遣ってくれました。先生だけでなく当時のクラスメイトもほどよい距離で接してくれたこともありがたかったです。

私の場合、先生が親身になってくれたおかげで安心感を得ることができました。それと、クラスの雰囲気など環境も立ち直るきっかけには大切だと思いました。当時のクラスは、自然に私を受け入れてくれた感じがしました。私は、学校に行きづらくなったことで悲観もしましたが、先生や友達の対応によってその後がんばることができました。

耳心地の良い言葉をかけることはできるかもしれませんが行動に移すことで信頼感が生まれると思います。犯罪や非行に走る人は、そのような人が身近にいなかったり環境が悪かったのかなと思います。親身に寄り添ってくれる人や存在を肯定してくれる人がいれば、自分はいても良い人間なんだと思えると思います。私は、自分を信頼してくれる人を裏切りたくありません。信頼してくれる人とは、形だけでなく心で繋がっている人のことです。口先だけ優しい言葉をかけても相手は、すぐに勘づくと思います。

それから、自分の努力だけでは、どうしようもない環境におかれている場合もあるかもしれません。私も学校に行きづらくなった環境を自分一人では解決できなかったと思います。

どんな環境下の人たちにも手がさしのべられる世の中になってほしいと思います。卑屈になって、社会的に失うものが何も無いために犯罪を起こすことに何のちゅうちょもない人を作らないよう、心の寄りそいは必要だと思います。

小学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

人と人とのつながりを大切に

富山県上市町立陽南小学校　五年　森井（もりい）　このみ

私は、人と人とのつながりを大切にすることが、社会を明るくするために必要だと考えます。そう考える経験が三つあります。

一つ目の経験はあいさつです。私はあいさつには、「あいさつをする人もされた人も明るく元気にする力がある」と思っています。なぜなら、あいさつをして相手があいさつを返してくれたとき、とても明るい気持ちになるからです。

私の通っている上市町立陽南小学校は、全校児童五十人の小さな学校です。元からみんな仲良しですが、明るく元気なあいさつを交わすことで、さらに仲が深まると思い、五年生になると同時に、あいさつ運動に取り組んでいる運営委員会に入りました。

あいさつ運動は毎朝、運営委員会のメンバー五人が児童玄関前に立って、登校して来た子に、「おはようございます。」とあいさつをします。以前は、はずかしがっていた子も、だんだんなれてくると大きな声であいさつを返してくれるようになりました。

さらにあいさつを広めようと、運営委員会では、みんなが自分から進んであいさつをしてくれ

るようになるにはどうしたらよいか話し合いました。「運営委員会といっしょに玄関前に立ってあいさつ運動に参加してもらうのはどうか。」という意見が出たので、全校のみんなに呼びかけました。呼びかけをしてからたくさんの子がこの取り組みに参加してくれました。

このあいさつ運動を始めてから、最初と比べて、みんなのあいさつの声がとても明るく元気になり、一年生のみんなも、はずかしがらずにあいさつをしてくれるようになりました。学校のふんい気が前より明るく元気になっているように感じます。

二つ目の経験は、大雨被害です。六月の終わりに大雨がふって、家の近くの川がはんらんしました。家の二階から外を見ると、田んぼのいねがにごった水につかって見えなくなり、今まで見たことのない景色が広がっていました。そのため、家族で柿沢公民館にひなんしました。公民館に行くと、公民館の方々とは顔見知りだったし、陽南小学校の子がいる家族もいくつか来ていたので安心しました。私が安心することができたのには理由があります。柿沢公民館では、一か月に一回くらいのペースで、お菓子作りや工作、フラワーアレンジメントなどのイベントがあります。いつも楽しいので、積極的に参加しています。公民館の方々がやさしく声をかけてくれるし、学校が休みの日でも友達に会えるのでうれしいです。柿沢公民館が陽南校区に住んでいる人たちの交流の場になっているように感じます。積極的に参加していたからこそ、地域の人とのつながりができていて、ひなんしても安心できたのだと思います。

「大変な時ほど、やさしい声かけや人と人とのつながりがありがたく感じるね。」

と母が言っていました。私は、ひなんするまで不安だったけれど、地域の方々や、陽南小学校の友達に会えたので、ひなんして良かったなと思いました。

三つ目の経験は、作品応募です。私は去年の夏

休みに万引き防止のポスターをかきました。その時に万引きは犯罪の一つで、やってはいけないことだと知りました。私は犯罪を行ってしまった人の気持ちを想像しても分かりませんでした。でも、いろいろな犯罪のニュースを見ていると、「こまったときにだれも助けてくれないと、自分の生きている意味が分からなくなって、犯罪を行うのかもしれない」、「だれもひとりぼっちにならない社会をつくる事が大切なのではないか」と考えるようになりました。そんな社会をつくるためには、子どものころからきちんとあいさつすることを習慣にして、人と人とのつながりを大切にすることが大事だと思います。

そして、明るく元気なあいさつをすることで、相手に興味がある気持ちや、こまっていたら助けたいという気持ちを大きくすることができると感じています。運営委員会に入っていなかったら、あいさつを通して人と人がつながることについて深く考えることはなかったと思うので、入って良かったです。

ニュースをみると、世の中大変なことばかりだなと感じます。私の理想の社会はだれも苦しまずに暮らせる社会です。こまったときにはだれかに相談できたり助けてもらえたりすると、苦しむ人がへって犯罪防止になると思います。人と人とのつながりを大切にして、知り合いを増やすことが社会を明るくするために必要だと思っています。これからも自分から進んであいさつをしたり地域の行事に参加したりして、周りの人とのつながりを大切にしていきたいです。

小学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

こども食堂でつながる笑顔

大阪府池田市立石橋小学校　六年　森本（もりもと）　太蔵（たいぞう）

ぼくは、何年か前に母と一緒に「こども食堂」でボランティアをしていたことがあります。母にはじめたきっかけを聞くと、

「太蔵が困った時に相談できる場所をつくりたかったからだよ。」

と言っていました。ぼくはボランティア活動で、地元の方と料理をしたり、魚をさばいたりしました。また、小さい子供達と一緒に折り紙で遊んだり、宿題を教えたりと楽しい時間をすごしました。そこで、この体験を通してこども食堂はどういう場所なのか、どんなメリットがあるのかを考えてみました。

ぼくが行っていたこども食堂は、様々な人達が来て、食べて話して遊べるところでした。たとえば、小さな子供や大人、高齢の方、障害をもっている方、一人でも親子でも来ることができます。そして、家庭や学校や職場とちがう居場所をつくりたい、という人も気軽に来ることができます。そして、嬉しい事があった、落ちこむ事があった、とにかく話を聞いてほしい、そんな人達の話をしっかりと聞いてくれる人がたくさんいます。そんな話をしているうちに、年の差をこえた新しい友

達もできるかもしれません。また、そこでは様々なコミュニケーションをとることができるのではないのかと考えます。たとえば、親同士で子供を見てもらっている間に話し合う、子供同士で学校のことについて話し合うなどです。それに、子育て中やおなかに赤ちゃんがいるお母さん同士、なやみを相談できます。ぼく自身が他の学校の子達と話したこともあります。つまり、このこども食堂は食事をするだけでなく、様々な人が様々な目的で来ることができるのです。

ぼくは、こども食堂と非行の関係について考えてみました。そこに行くと、たくさんの人がいるので顔を知っている人が増えます。そうすると、話を聞いてくれる人が増えるので、困った時に相談できます。それに、周りの目も増えます。このようなことがあるので非行をおかしにくくなると思います。様々な人と関わりを持つということは、自然と地域に見守り隊ができるということなのです。実際、ぼくも町を歩くと顔を知っている人をよく見ます。学校から帰る時や習い事に行く時、帰るのがおそい時などです。また、自分が落ちこんでいる時にも見ます。見かけた時にはあいさつをするのですが、特に落ちこんでいる時に声をかけてもらうとホッとします。そして、この場所であたたかい手作りのごはんを食べることによって、満腹になって笑顔に幸せになると思います。つまり、こども食堂は地域の方々とつながることにより、非行や落ちこんでいる気持ちを減らして、笑顔や幸せをうんでいるのです。

ぼくは最後に、何のためにこども食堂があるのかということを考えてみました。ぼくはよく、ごはんが食べられない、一人でとてもさびしいというニュースを目にします。ぼくは、そんな子供達を少しでも笑顔に、幸せにできるように、また社会の大切な一員であることを自覚してもらえるようにこども食堂ができたのではないのかと考えます。そんな人達のためにボランティアをしていたと思うと社会の役に立っているような気がしてと

ても嬉しいです。

　このように、ぼくがボランティアを通して考えたことは、こども食堂は人とのつながりを大切にして、そのつながりで笑顔や幸せをうんでいるのではないのかということです。これこそが「社会を明るくする運動」ではないのかと思いました。ぜひみなさんも、困った時や悲しい時、嬉しかった時にもここでたくさん話して食べて笑顔になってほしいと思います。そしてこの「こども食堂」のように相談できる場所を日本中に、世界中に広げていけたらいいと思いました。

小学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

大切な心を守りたい

和歌山県岩出市立中央小学校　五年　坂本（さかもと）　陽（はる）

暴力や言葉のいじめなどを許してはいけないと言う意志と自分も相手も大切にしたいという、やさしい気持ちを持つ事が社会を明るくすることにつながるのではないかと考えました。なぜかと言うと、ぼくの社会が変わったからです。

ぼくが初めて経験した暴力のいじめは、小学三年生の時です。クラスメイトがぼくの上に馬乗りになって背中をたたくこうい、にぶい音がぼくの背中にひびいてきょうふで言葉が出なくなりました。一ヶ月半毎日です。毎日がまんしたのには理由があります。それは暴力をふるった後その子はぼくに手を合わせてあやまってくるのです。「ごめんね、もうしないから、大人の人に言わないで。お願い。」この言葉が、ぼくとその子の約束だと思いこみぼくが約束を破るのはよくないと間ちがえた選たくをしてしまったことが原因です。母が毎日ふえるアザにぎ問をもって聞いてきましたが、ぼくは「分からない。」と答えて過ごしていました。友達と関わるのをさけ、できるだけ一人の時間をふやしました。そしてついにぼくは決してしてはいけない事をしてしまったのです。急に黒くにごったいやな心が出てきて、四つ下の弟

の足を引っかけてたおしてしまいました。目の当たりにした母はおどろき、まずはぼくを左うでにかかえてから弟を右うでにだきました。その時ぼくの心がフワッとなって、たくさんの想いがあふれました。

「ごめんなさい。ぼくはなんて事をしてしまったんだろう。情けない。二度としない。」

と心でさけび、たくさんなみだが出てきました。黒いいやな心を晴らすために、弟の足を引っかけてたおしたのに、心が晴れるどころかギュッといたくなり苦しくなりました。決して気持ちよくなかったし、スッキリもしなかったのです。母は「アザの理由、言えないんだね。ずっと気にしてたよ。何かあったよね?探すからね。」とだきしめてくれました。ぼくの小さな世界では解決できなかった無限ループに光が差しました。それから今までの出来事が明らかになり、ぼくは安心して登校できるようになりました。

幸せな事にぼくは身近で心を見てくれる家族や友人にめぐまれていじめから解放されました。でも、同じなやみをかかえたままだれにも気づいてもらえず、まだいたんだままの人達がいると思います。暴力のいじめの経験を通して、どうすればいたんだ心をすくってあげられるのかを二つ考えました。

一つ目は、「いたい、苦しい、助けて。」の心のSOSサインに早く気づいて、安心する声かけをして、周りのみんなで守ってあげる事です。心がきずついた人は、きょうふから自分の力では解決する事がむずかしいです。やさしさや弱さにつけこんで強くしばりを強要されると、きずつけられた人は一人ではもうどうにもできないじょうきょうにおちいってしまうメカニズムが出来上がります。そこからのだっ出方法の一つとして、第三者のかい入が必要だとぼくは思いました。

二つ目は、手を出してしまった人の心によりそう事です。悪い事に手を出してしまい自分のしてしまった事に気づいて申しわけないと深く反省し

ている時に、周りのきびしい目線や態度に落ちこんでしまったり、生きづらさを感じてしまう人もいるかもしれません。でもその人達にも生きる希望が必要で、悪行への反省を決っしてわすれず心にきざみながら自分の幸せを探していく事も大切だから、人生の道すじをいっしょに考えてくれる第三者の手を借りて、自分の居場所を見つけてほしいと思います。

今回、母がぼくにしてくれた行動により、ぼくの世界が明るく変わりました。そのメカニズムを知ったぼくが出来る事は、他者にきずつけられたなやみは一人では深く暗いやみへ落ちてしまうから、今後は母がしてくれた役割をぼくがすることです。いつもとちがう様子のクラスメイトを見つけた時には、自らそっ先して声かけをしようと思うし、何か役に立てる事がないかを考えて行動していきたいと思います。もしかしたら問題を起こした人の周りにも、ぼくが目指そうとしている大人達がいたらそんな事が起こらなかったのかもしれないとも思います。今ぼくの社会である学校は明るいです。声かけは勇気がいるし、かんちがいや間ちがえた時ははずかしいです。様々な心のかっとうがあるけれど、ぼくはいいと思った事はどんどん実行したいと思います。失敗しても次に活かせばいいと思うし、経験して、自分も成長出来ます。助けたいと思う心は相手に伝わると信じます。みんなが当たり前のようにできるわけではないけれど、一人一人が意識を持って、いいふんい気にしたいと思う気持ちが重なる事で、今いるかんきょうは明るく変わると思います。

中学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

挨拶で明るい社会を

群馬県高崎市立塚沢中学校　二年　富所（とどころ）　美結（みゆ）

社会を明るくするために、今、私たちには何ができるのでしょうか。それを考えた時、私は「挨拶でこの町を変えるよ。」と言った母の言葉を思い出しました。

それは小学生の頃、母と妹と通学路を歩いていた時のことでした。向こうから数人の中学生が帰宅しようと歩いてきました。でも、すれ違う瞬間、挨拶をせず通りすぎようとしました。その時、母がその数人の中学生に向かって大きな声で

「こんにちは。気を付けて帰ってね。」

と声をかけたのです。すると中学生は

「はい。さようなら。」

と答えてくれました。その後母は宣言するかのように私に言いました。

「よし！お母さんは、この町を挨拶の町に変えるぞ！」

と。私は正直、母が何を言っているかよくわかりませんでした。けれど実際にさっき母が声をかけたら「さようなら」と答えたことから、挨拶をすると町が今よりも元気になることは当時の私でもわかりました。この町を変えるまで言った母の言葉は、少し大袈裟な気がしましたが、その言葉は

中学生になった今も、なぜか私の心にずっと残っています。

正直私は、近所の人に自分から大きい声で挨拶することは今も得意ではありません。でも母の言葉を思い出し勇気を出して見守り隊をしている近所の方に挨拶をしてみました。すると、

「おかえり。今日は暑かったね。気を付けて帰ってね。」

と笑顔で返してくれました。たった一言、勇気を出して伝えた挨拶に、こんなにも心が暖まる言葉を付けて返してくれたことに、なんだかとてもポカポカした気持ちになりました。改めて「挨拶」の意味を調べると、「日常の人間関係を円滑に取り運ぶための儀礼的な相互行為」とあり挨拶は一瞬で相手の心を動かせる大切なコミュニケーションであることに気づかされました。

社会を明るくするために、「挨拶」を通したコミュニケーションが人と人をつなぎ、犯罪や非行のない地域を作るのだと私は思います。あの日、母が言った「お母さんは挨拶でこの町を変える」は決して大袈裟な言葉ではなく、身近なことからできる社会を明るくするための第一歩ではないか、と今は強く思っています。非行や犯罪がなぜ起きるのか。もしかしたら、挨拶をせずコミュニケーションが希薄になっていることも原因の一つかもしれません。例えば、万引きや未成年の喫煙。もしも近所でよく挨拶をする大人がその場にいたら、万引きをするのを思いとどまるかもしれません。隠れて喫煙しようとした際に、良く挨拶する近所の方が通って「気を付けて帰ってね」と言われたら、喫煙せずにまっすぐ家に帰ろうと思うかもしれません。挨拶には「あなたをちゃんと見守っているよ」というメッセージが込められているようにも私は思います。そしてもう一つ。「こんにちは」、「おはよう」だけではなく「ありがとう」や「ごめんね」も大切な挨拶だと思うのです。そしてこれらの挨拶は、面と向かって相手に伝えるからこそ、たった一言で礼儀や感謝、謝罪の気

持ちも伝えられるのではないでしょうか。最近ではＳＮＳで、相手の顔を見ないで感情を伝える人が増えています。いつでも、どこでも思ったことを伝えられるメリットがある反面、とても簡単に人を傷つけてしまいます。ですが、面と向かって「ごめんね」を伝えることはとても勇気がいることです。だからこそ、日頃から面と向かって相手に「ごめんね」を伝えている人は、謝ることの重さに気づいているので、無責任な言葉で人を傷つけることも少ないと思うのです。

　このように、挨拶の輪を広げていくことで、人と人とのコミュニケーションが生まれ、お互いに見守り合える明るい社会を築けるのではないでしょうか。また、挨拶は相手の気持ちを大切にすることにも繋がり、犯罪のない、人と人とが助け合う、元気な町づくりに向かう第一歩になると私は信じています。

中学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

心のハイエナに寄りそうこと

栃木県立矢板東高等学校附属中学校　一年　芝本（しばもと）　天音（あまね）

夏休み、家族や友人たちと一緒にミュージカル「ライオンキング」を観た。

力強さが印象的な歌声とエネルギッシュなダンスはもちろん、鮮やかな衣装や舞台装置、広大なサバンナや深い渓谷などを感じさせる演出に魅了され、二時間四十分の公演はあっという間に終わってしまった。

ミュージカルを観た後の楽しみは、公演に使用された音楽を聴くことだ。一緒に観に行った家族と一緒に歌ってみたり、好きなシーンの物まねをしたりする。そうやってミュージカルを脳内再生して何度も物語をなぞっていて、ふと気になったことがある。ハイエナのことだ。

もちろん、自然の動物としての生態とは無関係だが、このミュージカルの設定ではハイエナは、他の動物から「薄汚い、卑劣、低能」などと蔑まれ、嫌われている。これは私たちの社会に置きかえれば、差別を受けているということもできると思う。そのようはハイエナたちからは、このライオンキングの物語はどのように見えているのだろうか。

ハイエナたちは、差別に慣れ切って自暴自棄に

なり、動物たちの話を真剣に聞こうとしない。国の外れの薄暗い土地に住んでおり、自分たちのことを侮辱する動物たちに、挑発的な態度を取り続けてきた。

そんな中、ライオンの王の弟は、皆から慕われ、尊敬される王様の兄を妬ましく思い、王座を奪おうと悪だくみをする。ライオンの王の弟は手下にしたハイエナたちに、自分の言うことを聞けば二度と飢えることはないと言う。ハイエナたちはついに自分たちが認められるのではと期待したのだと思う。しかし王の弟もハイエナたちを「下品で単純」などと蔑んでいて、本当に信頼しているわけではなかった。言われた通り、意図的に事故を起こして王を殺すのに手を貸してしまうが、王の弟が王座を奪った後も、約束の食べ物や水は与えられず、飢えに苦しみ続ける。結局、弟と一緒に国を追放されるという罰を受けてしまう。

このように、ハイエナ目線で物語を追うと差別をされて動物たちの輪に入ることのできない不器用なハイエナたちが、劣等感や疎外感から、王国の秩序を乱す勢力に加わり、良くない行動をした結果、ハイエナたちにとっては苦しい扱いをされてしまう、というもう一つのストーリーが見えてくる。

私たちの生活する社会でもライオンキングのハイエナのような疎外感を味わっている人、一方的にレッテルを貼られ、差別を受けて苦しんでいる人がいる。そのようなつらい環境の中でも、地域に居場所と仲間を見つけ、生きていく人もいるが、疎外感や劣等感が人の良心や判断力を低下させることもあると思う。その結果、暴力や違法な薬物との接触、詐欺の受け子にされてしまう可能性もある。犯罪につながってしまう人たちは、ハイエナと同じような背景を持つ人もいると思った。

私の母は保護司をしている。障害のある人たちの相談員の仕事をしている母は障害のある人が犯罪に巻きこまれてしまったり、そのことで居場所

を失ったりしてしまう場合があると知り、保護司の役割に興味を持ったそうだ。

人間は私が見たミュージカルのように、姿かたちでそのキャラクターを推し量ることはできない。一人ひとりの内面に経験からくる考え方や物事の捉え方の違いがあり、それらのことでその人の行動も変わっていく。

守秘義務があるので、母が関わっている当事者の方については、「普通に生活している人だよ」と聞くのみである。普通に生活しているからこそ、罪を犯してしまったことで自分自身を見下したり、社会からの阻害を感じたりして、新しい「ハイエナ」が生まれてしまうのではないかと思う。だから、一人ひとりのわずかな違いや苦しみに寄りそって応援し続ける保護司の方たちの働きが大切なのだと思う。

母が保護司として「社会を明るくする運動」の啓発活動に参加し、お祭りでチラシ配りをしていた。渡したチラシを受け取って歩いていく人たちをなんとなくながめていたけれど普通に生活をしてお祭りを楽しんでいるように見えて、疎外感や劣等感に苦しめられている「ハイエナ」を心の中に育てている人は、きっとあの場にもいたのではないだろうか。もしかしたら、普段の生活の中でも多数いるのかもしれない。そのような人たちに保護司の方たちの活動が届いて、支えたいと思っている人がいるということを知ってほしいし、私も理解を深めていきたい。

中学生の部

日本BBS連盟会長賞（優秀賞）

あなたと私

山口県長門市立仙崎中学校　三年　美濃（みの）　穂乃花（ほのか）

毎朝、私が手にする朝刊、そこから犯罪という言葉が消えたことはない。一度罪を犯し、犯罪者と呼ばれた人たちは、孤独の中を生きていかなければならないのだろうか。未来は、暗闇のままなのだろうか。今までの私であれば、この問いに対しては、即答しかねていただろう。しかし、ある詩と再び出会い、詩人の思いと向き合ったことで、私のこの未熟な考えは、大きく変化したのだった。

その詩とは、「私と小鳥と鈴と」であり、日本を代表する詩人の一人、金子みすゞさんが書き残したものである。

「鈴と小鳥とそれから私、みんなちがってみんないい」の一連は、誰もが愛して止まないフレーズであるが、実はこの詩には、もっと深い意味が込められていたのだ。それを私に気付かせて下さったのが、みすゞ記念館館長である矢崎節夫先生だった。先生は、私達に優しく問いかけるように、また一言一言、言葉を選びながら次のように話された。

「みなさんは、なぜみすゞさんは、詩の最後の一連を『鈴と小鳥とそれから私』にしたと思います

か。『私と鈴とそれから小鳥』でもよかったのではないでしょうか。」と。そんな風に考えたことがなかった私は、矢崎先生の言葉に強い衝撃を受けた。その後、先生は、続けて次のように語られた。「みすゞさんは、『私』を最後に置くことで、相手を理解しようとしたのです。英語で理解するとはｕｎｄｅｒｓｔａｎｄと言います。つまり、みすゞさんは、相手を理解するためには、相手よりも『ｕｎｄｅｒ＝下』に立って考えることが大切なのだと伝えたかったのです。私とあなたでは分からない、あなたと私だからこそ分かり合える気持ちもあるのです。」と。言葉の並び方など大したことではないと思っていた私は、そのとき、みすゞさんの懐の深さを感じたとともに、自分の心の狭さを痛感した。

「私とあなた。ではなく〝あなたと私〟の視点」実際、自分自身は、どちらに比重を置いているだろう。以前の私は、みすゞさんが詩に込めた「相手を思いやる気持ち」とは正反対の「自己中心的な考え」が前面に出ていた。自分本位で物事を考え、自分の考えが正しいと思っていたのだ。家族が私のためを思って言ってくれた忠告にも聞く耳を持たず、逆に腹を立てることもあった。また、友達に気をつかうぐらいなら、一人のほうが楽だと自分勝手な解釈をし、特定の友達関係を築こうとはしなかった。今思うと、「何を考えてるの。」と当時の自分に喝を入れたくなるぐらいだ。しかし、ある時からそんな私にも話しかけてくれ、優しく接してくれる友達が出来た。いつの間にか、自然と私の傍には、彼女らがいて、たわいのない話で盛り上がっては、大笑いをした。そこには、肩の力を抜いたままの飾らない自分の姿があった。私にも親友と呼べる大切な存在が出来たのだ。きっと、このときの私は「あなたと私」という気持ちに一歩近づけたのだと思う。

　ずっと「私とあなた」に重きを置いていた自分が、彼女たちから受ける優しさや温かさ、ありのままを受け入れてくれる懐の広さのお陰で変わる

ことができた。そして、今、楽しいときだけでなく、辛く悲しいときや困ったときにも友達や家族が傍にいて支えてくれていることに感謝している。

「あなたと私」という考えを受け入れることで、見える景色は、大きく変わった。「私とあなた」の頃は、自分だけの世界で物事を考え、それは小さく寂しいものだった。でも、今は違う。「あなた」がいることで、私は何倍もの力をもらえるし、強くなれる。優しくなれる。人の温かみを知り、「もっともっと人と関わりたい。」と思うようになった。彼女たちとの出会いが、かつての私に転機をもたらしてくれた。本当に出会えてよかった。私は、これからも自分を取り巻く周囲の人々への感謝の気持ちを忘れずに生きていきたいと思う。その根幹には、みすゞさんの言葉「あなたと私」という考え方があり続けるだろう。

世の中の犯罪をゼロにすることは不可能かもしれない。しかし、一度でも罪を犯した人たちが再び犯罪に手を染めることのない世の中を目指すことは出来るはずだ。一度犯罪者と呼ばれた人たちが再犯してしまう原因の一つは、自分の未来は絶望的だと不安に押しつぶされてしまうからだと思う。だからこそ、彼らに未来への希望を持たせ、再犯を絶対に防ぐために、私たちは、「あなたと私」の視点で彼らと向き合う必要があると思う。「あなたと私」で手を差し伸べることで、彼らのその先は変わっていくに違いない。そうすることで、一つでも多くの犯罪を減らすことが出来るのではないだろうか。

私はその先に、誰もが青く澄んだ空を見て、「綺麗だ。」と思える、明るい未来が広がっていることを祈っている。

小学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

みんなでつくろう明るい社会

千葉県千葉市立あすみが丘小学校　六年　渡邉（わたなべ）　心結（みゆ）

私は保護司である祖父にインタビューをして、「よくみる・つながる・受け入れる」の三つが社会を明るくするカギだと思いました。

まず「よくみる」についてです。この間学校で更生保護についての手紙が配られました。その手紙には、「更生しようと努力していても、仕事に就けず再犯してしまうなどして、更生できない人が多い。」と書かれていました。ここで少し考えてみてほしいです。あなたは今、更生しようとしている人を雇うか面接しています。この人を雇いますか。雇いませんか。世の中のほとんどの会社は雇ってくれません。あなたはどうですか。どんな理由をもとに雇うか雇わないかを決めましたか。では、あなたが判断する材料となった理由ですが本当にきちんと更生しようとしている人をみて言っているものでしょうか。どれも色眼鏡越しでみて判断していませんか。更生しようと努力している人たちは自分の犯した罪を認め、罪と向き合い、再び世の中の一員になろうとしている人たちです。色眼鏡を外して、その人柄をみることで、再犯が減ると思います。また、何かをたのまれることで、自分が信頼されている、必要とされてい

ると感じられて、自信になると思います。だから、更生するために、仕事をするというのは、更生する人の大きな力になると思います。

次に「つながる」についてです。祖父が、「昔は周りの人とのつながりが強かったが、今は弱くなってきてしまったね。」と言っていました。また、年々犯罪や非行が増えてきているそうです。祖父の話とこの現状から「つながりが強いと犯罪や非行は少ない。反対に、つがなりが弱いと犯罪や非行は多い。」ということが考えられます。では、以前のような強いつながりを持つにはどうしたらよいのでしょう。私たちができることは二つあります。

一つ目は「地域の行事に参加する」です。地域の行事は周りの人と交流し、つながることのできるよい機会だと思います。しかし、「ちょっとハードルが高いな。」と思う人もいるかもしれません。

そこで二つ目は「あいさつをする」です。あいさつをすることは一番身近で、やりやすいと思います。あいさつをすると、お互いの心と心がつながります。

このように自分にできることを実際にやってみることで強いつながりが生まれて、私たちがくらしやすい社会になるのではないでしょうか。

最後に「受け入れる」についてです。祖父に保護司の仕事内容について教えてもらいました。更生しようとしている人と話す「面談」をしたり、薬物乱用や未成年者の飲酒・喫煙など犯罪や非行を減らすために呼びかけたりしているそうです。更生のための「面談」は、今と昔ではちがいがあるそうです。今は市役所で面談をしていますが、昔は保護司の人の家で面談をしていたそうです。祖父が保護司になったばかりの頃は、家で面談をしていたそうで、それを聞いて「すごいなぁ。」と思いました。なぜそう思ったのかというと、更生しようと努力している人とはいえ、やっぱり犯罪や非行をしてしまった人を家に入れて、話をす

るというのは不安で、勇気が必要だと思ったからです。また祖父が「保護司をするのは家族の理解と協力が必要なんだよ」と言っているのを聞き、祖父を支える祖母もすごいと思いました。祖父のように更生しようとしている人を受け入れてくれる人が増えたら、立ち直りやすい社会になると思います。

このように社会を明るくするために、私たちにできることはたくさんあります。「よくみる・つながる・受け入れる」といったことを実際に行動に移すことで、社会がほんの少し変わっていくと思います。あなたの理想の社会はどんな社会ですか。その社会を創るのは他でもない、あなたを含めた私たちです。この社会の主人公は私たち。みんなでつくろう、明るい社会。

小学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

傷つけたものたちへ

広島県広島市立古市小学校　六年　鄭（てい）　潤希（ゆにき）

最近、有名人が犯罪者になったり、自分で命を絶ってしまう事件をよく目にします。その原因の多くが精神的なものだと聞きます。個人や周りの環境に関する悩みの種が積もりに積もってどうしようもなくなってしまうことが罪を犯す理由だそうです。つい先日までテレビで活躍し、傍から見ると順調に過ごされているように見えていたので驚きを隠せませんでした。見た目ではわからない辛さや苦しみから逃れる方法として彼らがとった策が良かったのかは今の私にはわかりません。

また、私にもとても辛かった時期がありました。学校生活に馴染めず、その悩みを誰にどう伝えたらいいのかわからない、でもどうにかしたい。そんな思いが頭の中で目まぐるしく駆け回っていて、情緒が不安定でした。そこで、当時の幼かった私が気持ちのバランスを保つためにとった行動が物に当たって発散することでした。自分の定規を壊したり、赤鉛筆に穴を開けることで怒りを少しだけ鎮めることができました。物に責任はないのだから壊すのは悪いことだと分かっていたけれど、あの時の私には必要な行動でした。でも、壊した文房具をその後どうするか、家でも学校で

も処分できず、結局は見つからないことを祈って筆箱の隅に隠しました。自分では上手く隠したつもりだったのですが、ある日、母に

「最近何かあった？悩みがあるんじゃない？」と聞かれました。私は咄嗟に

「なんで？」

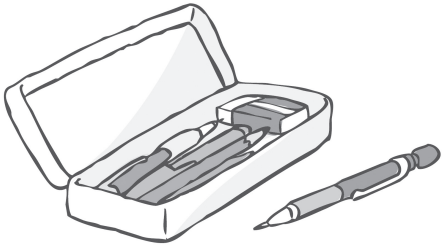
と聞き返しました。すると、母が壊れた定規と赤鉛筆をそっと私の前に置きました。私は誰にも筆箱の中を見せないようにしていたので、動揺しました。それから母に時間がかかってもいいから気持ちを聴きたいと言われましたが、言うことが怖くてなかなか言葉にできませんでした。何故なら、打ち明けることで相手がどう思うかという不安や、思い出したくない辛い気持ちがよみがえるという恐怖が邪魔をしたからです。しばらく俯いていると、ふと母が置いた文房具が目に留まりました。手に取ってみると、傷でガリガリになっているところがいくつもありました。徐々に壊した時のことや私の代わりに怒りを受け止めてくれたこの文房具への申し訳なさが溢れてきて、涙が出てきました。母は泣いている私の横にずっといてくれました。不安や恐怖を涙が少しずつ洗い流してくれて、ようやく母に私の思いを話すことができました。

私には気づいて一緒に考えてくれる人がいました。私物に当たることで一時的にでも辛さを発散することができました。でも、周りが気づけなかったり、辛さを抱えた人がずっと溜め込んだままでいたら先に書いたようにいつかは犯罪者になってしまったり、自ら命を落とす可能性があると考えます。

悩みを聴いてもらえる窓口はたくさん設けられていても、本人が苦しみや辛さを打ち明けるときに当時の不安や恐怖を思い出しながら伝えなければならないところに問題点があると私は感じます。さらに、今の社会では悩みを抱え、その悩みを発信できない人を弱いと感じる人たちが一定数はいて、ＳＮＳなどで言葉の刃を浴びせることが

あまりにも多く、そのことがより打ち明けづらい社会をつくっているとも思います。言葉の刃は無限に増えていくので今の社会でゼロにすることはとても難しいことですが、だからといって何もしないという理由にはならないと思います。一人一人の力は小さくても、悩みを抱える人に「いつでも気にかけているよ」ということを伝え続けること、その人の心の悲鳴を敏感に察知することが社会を明るくする第一歩なのではないでしょうか。

私も社会の一員として悩みを抱えている人の心の悲鳴に耳を傾けることができる人でいたいです。



小学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

居場所のある幸せ

熊本県熊本市立帯山西小学校　六年　森田（もりた）　桜（さくら）

「ねぇ、ばぁちゃん、社会を明るくするってどういうこと？」と祖母に聞くと、「それはね、桜が笑顔で大きな声であいさつしたり、お友達をいじめずやさしくして明るい態度で人に接して、まわりを笑顔で明るくすれば自然と一人一人がやさしくなり社会も明るくなるよ。」と言って、自分の働いている老人ホームの話をしてくれました。

私の祖母が働いている老人ホームは、犯罪・非行にはしり刑務所から出て、更正しようとする人達を受け入れている「協力雇用主」だそうです。私はどういう施設かもしらず施設には祖母と一緒に行くだけでしたが、勉強のために事務長になぜこういう事業をはじめられたのかいろいろと見学し、説明をしてもらいました。犯罪・非行という罪をおかした人は、今までは、こわい人のイメージしかなかったのですが、介護を一生けん命されていて言葉使いもやさしく、すごいなぁと思いました。ニコッと私に笑いかけてくれて私もこれからは、偏見の目で見ることをやめて、がんばってる人を応援したいと思いました。

そして事務長がまず社会貢献が一番したかったし、罪をおかした人を犯罪に戻らない戻さないよ

うにしたいと熱心に話され、日本は世界一安全な国。犯罪・非行をした人を社会から排除するのではなく受け入れる事が自然にできる社会にし、社会復帰を助け、少しでも役に立てればと十年前から受け入れていると聞き、またも私は感動し、こういう所があれば少しずつでも再犯もへり幸せへの道が作れると思いました。何をきいても感心する事ばかりでそこのスタッフの方々もそういう事をしっかりと学び受け入れて、わけへだてなく一緒に明るく仕事をされ、信頼もされている様子で入居者のおじいちゃん、おばあちゃんにも笑って声かけておられました。一番私が驚いたのが三人の方が三年以上働いておられ二人の方が介護福祉士の国家試験にうかられ、もう一人の方が今年挑戦されるとの事。がんばられているなぁ。負けないように私も何事にもがんばっていきたいと思いました。

やはり、再犯をくり返される方々は、帰って住む家のない人が多いそうです。生活の基盤となる「家」も探し確保して保証人にもなり、老人ホームの事務長、スタッフの方々が支援していてきっと立ち直られると思いました。家は大事です。帰る家がないとゆっくり体を休める事もできません。

今度は社会に恩返し、もう一度社会の輪に入ってもらい「ありがとう。」とみんなから言われ、自分の力でお給料をもらって生活していく事。自分の居場所を作る幸せを自分の力でつかみとってもらえたらいいなぁと私は帰りながら思いました。まだまだ何もできない小学六年の私。いろいろな事を勉強していきたいと思いました。

中学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

犯罪者の在り方

山形県長井市立長井北中学校　二年　松木（まつき）　哲翔（てっしょう）

あなたは、過去に罪を犯した人にそのあとどうなって欲しいとおもいますか？

ぼくは、去年の夏休みに実際に事件に遭いました。留守中の祖父の家にインドネシア人の男の人が扉を壊して不法侵入してきたのです。そのときぼくは、もしかしたら後ろから刃物で刺されたり、ハンマーなどで頭を叩かれたりして死ぬかもしれないと、生まれて初めて感じました。ぼくは、その日の夜は、怖くて、寝ることができませんでした。次の日には、二度とこんなことにならないでほしいと、強く思いました。そのあとに家族や祖父母と話し、セキュリティのためにセコムをつけようとなりました。でもそれには、何百万もかかります。ぼくは、こんな犯罪をおこす人さえいなければ、こんなに大変なことにもならないし、あんなに恐怖を感じることもなかったと思いました。この事件をきっかけに改めて、犯罪は絶対にやってはいけないと思いました。今までぼくは、何度もニュースで犯罪に関することを聞いたけれど、心のどこかで他人事だと思っていました。しかしこのことをきっかけに、犯罪の怖さが知ることができました。いい経験だと思います。

ぼくは、考えたことがあります。罪を犯してしまった人が逮捕されて出所した後どうなるのかということです。母に聞いたところ、罪を犯すと、就職するのが難しくなり、入れてくれる会社がほとんどないと聞きました。確かにぼくも犯罪者にはいなくなってほしいと思ったし、世の中の考え方もわからなくもないです。しかし、ぼくは罪を犯した人も受け入れてほしいとおもいます。なぜなら、今回の事件のインドネシア人の方も、インドネシアから日本へ、インドネシアに住んでいる家族のために働きに来ていると聞いたからです。この方は犯罪を起こして捕まってしまいましたが、そのあと反省して心を入れ替えると、祖父母に謝罪をしにきました。しかし、そのインドネシア人の方の働いていた会社の社長は、ある程度働かせたら、クビにすると言っていました。ぼくは、それを聞いてすごく酷いと思いました。しかしそれが罪を犯した人への罰なのだと思います。でも罪を犯したとしても心を入れ替え反省をしたなら、その人たちのことを、快く、というのは無理かもしれないけれど、少しずつ受け入れてほしいと思います。

ぼくは、この事件をきっかけに、罪を犯すことは絶対にやっていけないことだし、なくしていきたいと思いました。しかし、ぼくはこれ以上にこの事件をきっかけに考えたことがあります。それは、罪を犯してしまった人を受け入れてほしいということです。罪を犯した人でも反省をして心を入れ替えた人はたくさんいると思います。だからそういった人たちを少しずつ受け入れられる社会になっていけばいいと思います。

中学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

明るい地域社会を目指して

愛媛県宇和島市立城東中学校　三年　島瀬（しませ）　陽（みなみ）

私の通っている学校ではボランティアに力を入れています。ボランティア活動として、朝の校内清掃や挨拶運動、地域行事でのお手伝いなどを行っています。私は生徒会のメンバーとして地域の公民館であった行事のお手伝いをさせていただきました。地域の方々は私たちにとても優しく丁寧に仕事内容を説明してくださり、すぐに緊張がほぐれました。このような温かい地域の人々に見守っていただいているからこそ、私たちは安全に学校生活を送れているんだと思います。たまに私たち生徒が良い行いをしていたことを地域の方が学校に報告してくださり、そのことが学校で紹介されることがあります。そのときはみんなとても温かい気持ちになっていると思います。ですが、あまり良くない行い、例えば登下校の態度が悪かったことなども学校に報告してくださいます。そのおかげで私たちは間違いに気付くことができ、将来そのような間違いをしてしまうことを地域の方々のおかげで防ぐことができているのです。

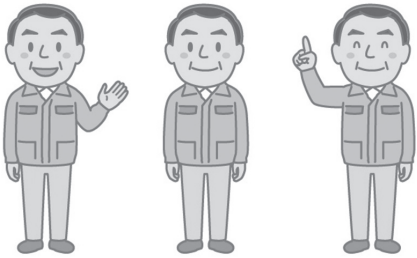
　このように、地域の方々の行動は私たちの住んでいる地域を明るくしてくださっていると思います。では、自分たちが「社会を明るく」するため

にはどんなことができるのでしょうか。それについて考えるために、まず私は明るい社会について調べました。すると、明るい社会とはすべての国民が、犯罪や非行の防止と犯罪や非行をした人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせている、犯罪や非行のない安全で安心な明るい地域社会のことだと分かりました。明るい社会を創っていくためには犯罪や非行の防止だけでなく、犯罪や非行をした人たちの更生についてまずは自分が理解しなくてはならないんだと実感しました。犯罪や非行をした人たちが更生していくためには周囲の環境がとても重要だと思います。犯罪や非行をした人たちが社会復帰する際に最も困ることは就職することが難しいことだと聞いたことがあります。そこで、私は厚生労働省と法務省が協力雇用主という刑務所出所者等を雇用する職場を募集しているということを知りました。このような職場が増えていくと更生したい人たちにとってとても助かるし、そこで働いていく中でも更生していくことができるのでとても良いなと思いました。まずは、このように協力雇用主を募集しているということを少しでも多くの人が知って、少しでも多くの人が協力雇用主になろうと思ってもらうことが大事だと感じました。私も今まではこのことを知らなかったけど、知ったことによって自分も将来このような活動に協力したいと思うことができました。私たちが「社会を明るく」するには、まずは知ることが大切だと私は思いました。

私が小学校高学年のとき、新型コロナウイルスの流行が始まりました。流行し始めた頃はみんな怖いという意識があったからか、感染した人やその家族、医療関係の方々が差別や偏見をされるというニュースをよく見ました。事実とは異なるうわさが広まったという話も聞きました。また、私たちの住む地域と近いところで感染者が出たときにもうわさに尾ひれがついて広まっていったことを覚えています。犯罪を犯してしまった人も同じ

で、今近くで犯罪を犯した人がいると知れたら怖いという意識からいろいろなうわさが流れたり、差別や偏見をされたりするのではないかなと私は思います。確かに犯罪者と聞いたら少し怖いのかなと思ってしまいますが、その人が更生したいと思っているのなら私たちがその人のことを理解しようとし、差別や偏見の心を持たずに接することがとても大切だと思います。差別や偏見によって更生しようとしている人たちのことを踏みにじらないようにしたいです。一人一人がこれを意識することができれば、暮らしやすい地域になってどんどん「社会を明るく」していくことができると思います。

　このように、地域の方々が私たち子供を守ってくださっていてさらに、私たち一人一人が更生していくために大切なことを考え、知り、理解を深めたり、差別や偏見の心をなくすことで明るい社会を創っていくことができるのではないかなと私は思いました。みなさんも明るい社会についてこれを機に知って、考えてみてください。その先にはきっと明るく生きやすい社会があるはずです。



中学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

「悩んでいる君」に気づける社会へ

沖縄県宮古島市立城東中学校　一年　下地（しもじ）　杏梨（あんり）

あなたには今、悩みを打ち明けられる人はいますか。悩みを打ち明けるということは、人に弱さを見せるようで難しいと言う人もいるかもしれません。でも私は、悩みを打ち明けられるような信頼できる「人と人との関係づくり」が、今私たちが生きている社会を、より良くしていくことになると思います。

毎日のようにニュースでは、犯罪のニュースが報道されています。「以前から、何か起こすかもしれないと思っていた。」というケースもあれば、「まさかあの人が。」という思いがけない人が、取り返しのつかないことをしてしまうケースも少なくはありません。どちらのケースにしても、なぜこのようなことが起きてしまったのか。気づいていたら止めることができたのかもしれない。と、胸が苦しくなります。

私は以前、友達との関係がうまくいかず悩んでいたことがありました。「自分で何とかしなきゃ」と、家族や先生にも話せず、どうしていいかわからず、学校からの帰り道は涙をこらえ、うつむきながら歩いていました。

そんな毎日をすごしていたある日、いつも登下校

の時に挨拶する地域のおばあちゃんが「杏梨ちゃん、どうしたの。何かあったの。」と、優しく声をかけてくれました。その途端私はこらえていた涙があふれ、涙を手でぬぐいながら今までのことをすべて話しました。その時、おばあちゃんは、私の話を柔らかな表情で「うん、うん。」とうなずきながら聞いてくれました。ただ話を聞いてもらっただけで、がちがちに固まっていた私の心は溶かされ、安心しました。何だか、久しぶりに呼吸ができた気がしました。私は、そのおばあちゃんのおかげで、もう一度友達と話してみようと勇気をもらい、立ち直ることができました。今では友達との関係も良好で、毎日充実した日々をおくることができています。

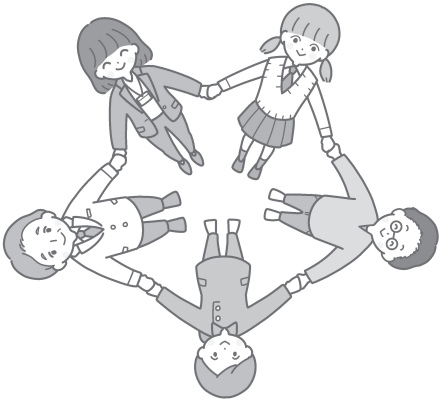
最近、私は犯罪や事件のニュースを見た時あのおばあちゃんのことを思い出しました。どうして、おばあちゃんは私の「悩んでいる姿」に気づき、声をかけてくれたのだろうか。と考えてみました。私たちの住んでいる地域では、地域の人たちで夏祭りを開催し、子どもからお年寄りまで、楽しい時間を過ごすイベントがあります。また、交通安全のボランティアとして、地域の方々が毎朝笑顔で「おはよう。今日も元気にいってらっしゃい。」と、登校する際に挨拶をしてくれます。他にも、交番の警察官の方が作ってくれたお好み焼きを、みんなでおいしくいただくこともあり、地域の方々と触れ合う機会が多くある地域です。きっと、この沢山の交流のおかげで、地域の子どもは、みんなで見守ろうという気持ちが深まり、私の「悩んでいる姿」に気づき、声をかけてくれたことにつながったのだと思いました。

悩みを打ち明けるということは、簡単なことではないのかもしれません。そんな人ほど自分の気持ちを素直に伝えられないまま、周りの目を気にして我慢して笑っている。そうしているうちに、我慢していることに慣れ、ある日突然、何かをきっかけに心が壊れてしまいます。「どうして気づいてあげられなかったのだろう。」と後悔しても

遅いのです。

人と人との関係は、家族だけでなく、地域で交流する場を作り、互いに相談し合える仲を築くことはもちろんですが、近くにいる相手を気にかけることが第一歩だと思います。私の悩んでいる姿に気づいてくれたおばあちゃんのように、「どうしたの。」という一言をかけることが当たり前のようにできる人が増えれば、犯罪や非行のない明るい社会を創ることにつながります。目の前で泣いている人だけでなく、いつも笑っているあの子にも、心の中で秘めている何かがあるかもしれません。でも、誰かの相手を気にかける一言で、大きなことにつながる小さな火種を消すことができると、私は思います。

私の悩んでいる姿に気づいて、声をかけてくれたあのおばあちゃんのように、私も声をかける勇気、相手を気にかける優しさを持った人になりたいです。そして、地域の一員として見守られていることに感謝し、地域のために、私ができることを探していきたいです。それが、悩んでいる人に「一人じゃない」と伝えるきっかけにもなると思います。中学生の私にできる小さなことが、社会を明るくする一歩になることと信じて行動していきます。



更生保護法人　立川更生保護財団について

立川更生保護財団は、立川ブラインド工業株式会社の創業者である立川孟美氏が、犯罪や非行をした人達の改善更生を図るために地道に更生保護活動に取り組む民間ボランティアの方々の姿に深く感銘を受け、昭和63年10月に設立した法人であり、以来、更生保護事業の推進に助力してきました。

財団では、犯罪や非行のない明るい社会の実現のため、次のような事業を行っています。

一　〝社会を明るくする運動〟～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～への協力

本運動では犯罪や非行のない地域社会の実現のため、全国各地で様々な取組が行われています。財団としても、本作文コンテスト作文集の制作をはじめ、様々な取組に協力をしています。

二　更生保護ボランティアの活動への協力

更生保護の活動には、地域に暮らすたくさんの人達がボランティアとして関わっています。犯罪や非行をした人の立ち直りを地域で支える保護司、更生保護女性会、ＢＢＳ会といった民間の更生保護ボランティアが行う活動に対し、助成を実施しています。

今後も、犯罪や非行をした人の立ち直りを支援している方々への協力・応援を通じて、犯罪のない明るい社会の実現に向けて、積極的に事業を展開していきます。

第74回“社会を明るくする運動”
～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～
作文コンテストのお知らせ

第74回“社会を明るくする運動”作文コンテストは次のとおり、実施いたします。
多くの学校でこの作文コンテストに取り組み、たくさんの応募をしていただきますよう、御協力お願いします。
なお、作文コンテストの詳細については、次ページの最寄りの保護観察所（各都府県の県庁所在地と、北海道では札幌、函館、旭川、釧路）にお問い合わせください。

○主催
法務省
“社会を明るくする運動”中央推進委員会

○後援（予定）
全国連合小学校長会／全日本中学校長会／全国小学校国語教育研究会／
全日本中学校国語教育研究協議会／公益社団法人日本ＰＴＡ全国協議会／
更生保護法人全国保護司連盟／一般社団法人日本更生保護女性連盟／
特定非営利活動法人日本ＢＢＳ連盟／更生保護法人日本更生保護協会

○応募規定
（1）資格
全国の小学生及び中学生

（2）テーマ
“社会を明るくする運動”の趣旨を踏まえ、日常の家庭生活、学校生活の中で体験したことを基に、**犯罪・非行のない地域社会づくりや犯罪・非行をした人の立ち直りについて**考えたこと、感じたことなどを題材としたものとします。

（3）原稿の枚数
400字詰め原稿用紙３～５枚程度

（4）応募先及び応募締切日
応募先：“社会を明るくする運動”都道府県推進委員会（事務局：保護観察所）
締切り：本年９月頃（締切日は各都道府県推進委員会によって異なります。
詳しくは、最寄りの保護観察所へお問い合わせください。）

（5）その他
応募作品は、他の作文コンテスト等への応募作品又は応募予定作品を除く自作・未発表のものに限り、原則として原本とします。応募に当たっては、題名、学校名、学年、氏名を明記してください。

○選考
“社会を明るくする運動”各地区推進委員会及び同各都道府県推進委員会によって選考し、同中央推進委員会に推薦された作品から、中央推進委員会において審査し、入賞作品を決定します。

○表彰（予定）
- 最優秀賞：法務大臣賞……小学生・中学生各１点
- 優 秀 賞：全国連合小学校長会会長賞……小学生３点
  全日本中学校長会会長賞……中学生３点
  全国保護司連盟理事長賞……小学生・中学生各３点
  日本更生保護女性連盟理事長賞……小学生・中学生各３点
  日本ＢＢＳ連盟会長賞……小学生・中学生各３点
  日本更生保護協会理事長賞……小学生・中学生各３点

お問い合わせ先 “社会を明るくする運動”都道府県推進委員会事務局

推進委員会	事務局(保護観察所)	郵便番号	住　所	電話番号
札幌地区	札幌保護観察所	060-0042	北海道札幌市中央区大通西12丁目	011-261-9225
道南地方	函館保護観察所	040-8550	北海道函館市新川町25-18	0138-26-0431
旭川地区	旭川保護観察所	070-0901	北海道旭川市花咲町４丁目	0166-51-9376
道東地区	釧路保護観察所	085-8535	北海道釧路市幸町10-3	0154-23-3200
青森県	青森保護観察所	030-0861	青森県青森市長島1-3-25	017-776-6419
岩手県	盛岡保護観察所	020-0023	岩手県盛岡市内丸8-20	019-624-3395
宮城県	仙台保護観察所	980-0812	宮城県仙台市青葉区片平1-3-1	022-221-1451
秋田県	秋田保護観察所	010-0951	秋田県秋田市山王7-1-2	018-862-3903
山形県	山形保護観察所	990-0046	山形県山形市大手町1-32	023-631-2277
福島県	福島保護観察所	960-8017	福島県福島市狐塚17	024-534-2246
茨城県	水戸保護観察所	310-0061	茨城県水戸市北見町1-1	029-221-3942
栃木県	宇都宮保護観察所	320-0036	栃木県宇都宮市小幡2-1-11	028-621-2391
群馬県	前橋保護観察所	371-0026	群馬県前橋市大手町3-2-1	027-237-5010
埼玉県	さいたま保護観察所	330-0063	埼玉県さいたま市浦和区高砂3-16-58	048-861-8287
千葉県	千葉保護観察所	260-8553	千葉県千葉市中央区春日2-14-10	043-204-7795
東京都	東京保護観察所	100-0013	東京都千代田区霞が関1-1-1	03-3597-0120
神奈川県	横浜保護観察所	231-0001	神奈川県横浜市中区新港1-6-1	045-201-3006
新潟県	新潟保護観察所	951-8104	新潟県新潟市中央区西大畑町5191	025-222-1531
山梨県	甲府保護観察所	400-0032	山梨県甲府市中央1-11-8	055-235-7144
長野県	長野保護観察所	380-0846	長野県長野市旭町1108	026-234-1993
静岡県	静岡保護観察所	420-0853	静岡県静岡市葵区追手町9-45	054-253-0191
富山県	富山保護観察所	939-8202	富山県富山市西田地方町2-9-16	076-421-5620
石川県	金沢保護観察所	920-0024	石川県金沢市西念3-4-1	076-261-0058
福井県	福井保護観察所	910-0019	福井県福井市春山1-1-54	0776-22-2858
岐阜県	岐阜保護観察所	500-8812	岐阜県岐阜市美江寺町2-7-2	058-265-2651
愛知県	名古屋保護観察所	460-8524	愛知県名古屋市中区三の丸4-3-1	052-951-2949
三重県	津保護観察所	514-0032	三重県津市中央3-12	059-227-6671
滋賀県	大津保護観察所	520-0044	滋賀県大津市京町3-1-1	077-524-6683
京都府	京都保護観察所	602-0032	京都府京都市上京区烏丸通今出川上る岡松町255-4	075-441-5141
大阪府	大阪保護観察所	540-0008	大阪府大阪市中央区大手前4-1-76	06-6949-6240
兵庫県	神戸保護観察所	650-0016	兵庫県神戸市中央区橘通1-4-1	078-351-4005
奈良県	奈良保護観察所	630-8213	奈良県奈良市登大路町1-1	0742-23-4869
和歌山県	和歌山保護観察所	640-8143	和歌山県和歌山市二番丁３	073-436-2501
鳥取県	鳥取保護観察所	680-0842	鳥取県鳥取市吉方109	0857-22-3518
島根県	松江保護観察所	690-0841	島根県松江市向島町134-10	0852-21-3767
岡山県	岡山保護観察所	700-0807	岡山県岡山市北区南方1-8-1	086-224-5661
広島県	広島保護観察所	730-0012	広島県広島市中区上八丁堀2-31	082-221-4495
山口県	山口保護観察所	753-0088	山口県山口市中河原町6-16	083-922-1327
徳島県	徳島保護観察所	770-0851	徳島県徳島市徳島町城内6-6	088-622-4359
香川県	高松保護観察所	760-0033	香川県高松市丸の内1-1	087-822-5445
愛媛県	松山保護観察所	790-0001	愛媛県松山市一番町4-4-1	089-941-9983
高知県	高知保護観察所	780-0850	高知県高知市丸ノ内1-4-1	088-873-5118
福岡県	福岡保護観察所	810-0044	福岡県福岡市中央区六本松4-2-3	092-761-6736
佐賀県	佐賀保護観察所	840-0041	佐賀県佐賀市城内2-10-20	0952-24-4291
長崎県	長崎保護観察所	850-0033	長崎県長崎市万才町8-16	095-822-5175
熊本県	熊本保護観察所	862-0971	熊本県熊本市中央区大江3-1-53	096-366-8080
大分県	大分保護観察所	870-8523	大分県大分市荷揚町7-5	097-532-2053
宮崎県	宮崎保護観察所	880-0802	宮崎県宮崎市別府町１ー１	0985-24-4345
鹿児島県	鹿児島保護観察所	892-0816	鹿児島県鹿児島市山下町13-10 鹿児島第3地方合同庁舎	099-226-1556
沖縄県	那覇保護観察所	900-0022	沖縄県那覇市樋川1-15-15	098-853-2946

“社会を明るくする運動”
ウェブサイト

“社会を明るくする運動”
作文コンテストについて
（法務省ＨＰ）

第73回“社会を明るくする運動”作文コンテスト入賞作文集

発　行　更生保護法人　立川更生保護財団
編　集　“社会を明るくする運動”中央推進委員会事務局
製　作　株式会社　双文社

※本作文集の作品を転載する場合は，法務省保護局更生保護振興課に御連絡ください。

令和6年3月発行

人はみな、
生かされて
生きてゆく。
更生保護ネットワーク